連句

猫蓑作品集XII

序

平成十三年中に作られた私どもの連句作品が、「猫蓑作品集Ⅻ」として出版されることは、私の最も欣快とするところである。

収める数は、歌仙三十四巻（前年も三十四巻）、源心十四巻（前年は四巻）、二十韻十二巻（前年も十二巻）、半歌仙十七巻（前年は二十一巻）、短歌行一巻（前年も一巻）、表合せ一巻（前年も一巻）、計七十九巻（前年は七十五巻）で、総数としては昨年度と大差はないけれども、細かに見ると、この一年の進歩・発展の兆が顕著である。

そもそも昨平成十三年は九月の同時多発テロ・十月のアフガン戦争と国際的にみても多事多端の厄年であったが、猫蓑会に取っても、五月、副会長で猫蓑会全員の心の寄り処であった式田和子さんを失い、九月には亀戸天神の禰宜で、猫蓑会の正式俳諧の支柱となって下さった木村庸雄氏が歿くなられ、十二月には猫蓑会と親交のあった新庄の北陽社前会長の笹白舟先生が逝去され、さらに、かく申す私も五・六月ごろから体調を崩し、七月癌センターに入院・手術する破目となり、その後、半年は連句はおろか、俳句もろくろく詠めない状態に陥ってしまった。

この苦境を切り抜け得たのは、全く猫蓑会員の覚悟と努力の結果である。たとえば本誌前号には四巻しかなかった源心が、この号では十四巻と急増しているのは、決して偶然の結果ではない。これは「猫蓑通信」第四四号に掲載されている通り、源心会の皆様が折角源心（二十八句・二花二月・四、一〇、一〇、四）という形式が考案されていながらあまり普及していないのを残念に思われ、コンクールを行なわれたからである。主催者の予想としては三十巻位、五十巻集まれば上々だろうと思っておられたのが、締切になると八十二巻の多きに達し、主催者の方は嬉しい悲鳴をあげられたのである。その結果、源心という形式のおもしろさが多くの猫蓑会々員に認識され、私も本当にうれしく思っている。

このような源心会の方々の認識と努力、またその積極性は、私ともども、猫蓑会々員の皆様が見習っていただきたいところである。

この外、本号の編集、出版に努力された方々、また校正に助力された方々にも深く感謝申し上げる次第である。

平成十四年一月二十日　　東　明雅

目次

序……東　明雅　1

歌仙

山茶花や……東　明雅　捌　8
煮魚の骨……青木　秀樹　捌　10
冬ノ翳　膝送り……丁那・健悟　玲・英二　12
青葦原……市野沢弘子　捌　14
巻尺の引き足……井上　鶴鳴　捌　16
秋天や……内田　麻子　捌　18
梅百種……梅田　利子　捌　20
渋谷に探す　文　音……梅田　實　捌　22
桃径庵の月……蒲原志げ子　捌　24
ゆく秋や……倉本　路子　捌　26
神の留守……上月　淳子　捌　28
真っ新な……近藤　守男　捌　30
東高（ひんがし）く……権頭　和弥　捌　32
鸛舞ひ降り……坂本　孝子　捌　34
梅雨曇り……佐古　英子　捌　36
熊谷草……式田　和子　捌　38
冬瓜の……下鉢　清子　捌　40
極道へ　文　音……杉山　壽子　捌　42
秋彼岸……鈴木　慎二　捌　44
われも風羅の……鈴木美奈子　捌　46
道の駅……副島久美子　捌　48
一の酉……染谷佳之子　捌　50
小春凪……橘　朱鷺子　捌　52
秋の虹　膝送り……満子・朱鷺子　代々子・弥生　54
蘭の秋……豊田　好敏　捌　56

黒南風や……長崎　和代　捌　58
皇女誕生……中田あかり　捌　60
於母影も……中林　あや　捌　62
海亀や……原田　千町　捌　64
聖　樹……東　郁子　捌　66
恋歌を……日高　英二　捌　68
蓑虫の……佛渕　健悟　捌　70
曳　舟……本田　弥生　捌　72
桃径庵の涙石……本屋　良子　捌　74

源　心

良夜かな……金久保淑子　捌　78
雲間の月……久保田庸子　捌　80
雪迎へ　文　音……桑原　美津　捌　82
五日月……小池　啓子　捌　84
ＩＴ革命……篠原　達子　捌　86
寒蘭の紅……島村　暁巳　捌　88
風鈴の舌……武井　雅子　捌　90
煤逃の……百武　冬乃　捌　92
祭かな……矢崎　藍　捌　94
口寄せの……山口　美恵　捌　96
赤　瓦　文　音……山田喜美枝　捌　98
藤の実の　文　音……吉藤とり子　捌　100
今朝の秋　文　音……文伸・卓　百合子・遙　102

二十韻

冬めくや……秋山志世子　捌　106
中の海……金山征以子　捌　108
戦はぬ旗……五味　蓉子　捌　110
時雨の色……鈴木千恵子　捌　112
風羅にも……鈴木　了斎　捌　114
街は雀色……高橋　豊美　捌　116
伊勢は津で……武村　利子　捌　118

蝉の声……松島アンズ 捌 120
銅の鍋……三木 俊子 捌 122
神酒(みわ)すこし……八代 嫋 捌 124
赤城嶺の……山口佐喜子 捌 126
神の留守……山田美代子 捌 128
花野かな 文音……吉村ゑみこ 捌 130

半歌仙

みちのくの 膝送り……泉子・けんのすけ 健悟 134
おらが春……青島ゆみを 捌 136
泪 色……池田やすこ 捌 138
葉 桜……加藤 治子 捌 140
初しぐれ……木村 真呂 捌 142
団栗の音……くの あや 捌 144
桐咲くや……式田 恭子 捌 146
彼岸かな……繁原 敏女 捌 148
沈丁花……高瀬 美保 捌 150
流星雨……棚町 未悠 捌 152
蕗の薹……生田目常義 捌 154
吉原鎖……登坂かりん 捌 156
マリアの像……長谷川芳子 捌 158
春の宵……松原 弘子 捌 160
陽はちりぢりに……松本 碧 捌 162
車田の稲穂……宮川 侊子 捌 164
牡丹雪……山本 要子 捌 166

短歌行

秋の富士……日高 玲 捌 168

表合せ 八句

漱石忌……秋元 正江 捌 170
発 句 冬の氷菓……秋元 正江 171
あとがき……下鉢 清子 172

歌仙

山茶花や

東　明雅　捌

山茶花や姫宮生るる佳き日和　東　明雅
鸛舞ふ冬萌の庭　鈴木　美奈子
画仙紙に即興の筆走らせて　篠原　達子
手作りケーキ客をもてなす　吉藤　とり子
赤鼻のマリオネットに月の笑み　美雅
旅芸人のかこつ露寒　と
森番の帽子に止まるちっち蝉　達
馬車の窓から招く秋扇　雅
見抜かるるロマンティストのテロリスト　美
五稜郭にて撮りしレリーフ　達
朝まだき鑼声ひびく前浜に　と
温泉めぐり揃ふ眷族　美
パソコンで情報通の喜寿傘寿　雅
カマンベールに尽す地ビール　と
月の下縁台将棋友とさし　達
景気回復待ち兼ねる町　雅
花に神宿る千歳の滝桜　美
無人の駅に斑雪踏みつつ

目借時(ナオ)床屋の椅子にうとうとと　達
　父母の顔夢に出てくる　と
カイバルの峠に埋むる小さき骨　美
　冬将軍に負けたタリバン　雅
瑠璃色にひかり輝く龍の玉　と
　関所跡よりなだらかな道　達
不倫めく恋のつまりの逃避行　雅
　バイオリニストフェロモンの弓　美
セブンティーン羽化のバストの誇らしく　と
　棟方描く飛翔天女図　達
自然薯の深々育つ月の頃　雅
　もってのほかの口取を出す　と
国体(ナウ)の壮行会に恩師来て　美
　むかし番長今は局長　雅
同居する座敷童子も五十年　達
　貰ひ煙草をちびちびと吸ひ　と
幹に觸れ笑まふ樹木医花の昼　美
　そよ吹く風に揺るるふらここ　達

平成十三年十二月九日　首尾
於　柏市光ヶ丘近隣センター

煮魚の骨

青木　秀樹　捌

煮魚の骨すすりけり弦の月　池田　やすこ
紫の郁子活けし竹籠　中野　昌子
赤い羽根紺の背広に声かけて　生田目　常義
混んだ電車で読書するわざ　青木　秀樹
消費税またも値上がり噂され　青木　泉子
ぬるい炬燵を好む父親　や
燗酒は備前ぐい呑み鄙の宿　昌
美人女将にたばこねだられ　義
なれそめは机並べた幼稚園　樹
ソプラノテナー愛のデュエット　泉
ゴシックの尖塔天を突き抜けて　や
夏のひばりはすぐもの忘れ　昌
有明に鰻屋忙し土用入り　樹
満員御礼はづむご祝儀　泉
立役も女形もいいね勘九郎　昌
マルチ人間本業はどれ　や
進水の船ゆるやかに花吹雪　泉
倉庫の裏に黄蝶現る　樹

あいさつに春の日傘を傾けて　や
乳母車には熟寝児の夢　昌
大リーグ決戦の場はニューヨーク　樹
せがまれてつい買ったティファニー　泉
お妾は色気むんむん絽の喪服　義
ごきぶりの群れ闇に蠢く　昌
山の村地上げ騒動駆け巡り　や
シュールな気分チョコの苦さよ　泉
痛風と糖尿病をなだめつつ　樹
内張りのない古い長靴　義
無垢の月修羅も解脱もみな照らし　昌
笑ひ茸には気をつけなされ　や
爺さまが新蕎麦打つと子ら並び　泉
汽笛鳴らしてD51　や
どさんこは頼りになってめんこくて　昌
着信メールパンドラの箱　樹
花明かり表札見れば御家流　義
奥の茶室にのどらかな声　泉

平成十二年十一月四日　起首
十二月二十五日　満尾
於　日生魚美味倶楽部「美晴」

冬の翳

冬ノ翳蝶ニモ玉子ボーロニモ　浅賀丁那（立冬二）
サザンカ散ッテ歩キ出ス象　佛渕健悟
ほうぼうに転居通知を書き終えて　日高玲
湯の煙突も見えるうれしさ　日高英二
兄弟竹刀合わせる月の庭　悟
西瓜の汁の染みついたシャツ　那
転トラの荷を草市に運び込み　二
指輪の泥を拭う新妻　玲
週一度夫に内緒の習い事　那
こまんたれぶー夢の中でも　悟
海鳴りの浜にちぎれたブロマイド　玲
安サラリーをぼやく警部補　二
年の瀬に小鳥預かる不運さよ　悟
ちょいと拝借魔女の煤竹　那
隠しても尾が見えますよ旦那様　二
朧月夜に歩く我が影　玲
催馬楽をひと節花をかざしつつ　那
この春愁は家伝なるらむ　悟

膝送り

復讐（ナオ）を誓えと王の死顔に　　玲
　どっと崩れる城の火柱　　二
雪原に遠ざかりゆく貨車の列　　悟
　始業の鐘を鳴らす教頭　　那
一年生もう土管から出てきなさい　　玲
　慌てて埋める恐竜の骨　　二
このところゴンベの麦が黒ずんで　　那
　呼び返される聖なりけり　　悟
密造の酒に当りし顛末を　　玲
　椰子の香のする船よりの文　　二
踊子として旅をするつれづれに　　悟
　今宵は望の姨捨の月　　那
信仰（ナウ）も薄き祈りの秋哀れ　　玲
　仮面打つほどおかしきはなし　　二
ミラノにはもう帰れない帰らない　　那
　サッカーボールを指で回して　　悟
それぞれの鍋や網やと花筵　　玲
　枕に据える永日の石　　二

平成十二年十一月七日　起首
平成十三年四月十五日　満尾　　悟　　那

青葦原

市野沢弘子　捌

青葦原仰げば雨は銀色に　市野沢　弘子
　翅をたたみし薄羽蜉蝣　山口　美恵
オルゴールからくり人形会釈して　原田　千町
　バターたっぷりねかすパイ生地　八代　嫋
鎧戸を押し開け入るる明き月　橘　朱鷺子
　忘れ団扇で煽ぐ焚口　島村　暁巳
熊架（ウ）は湖の岸いまは留守　町　鷺
　トロッコ電車山陰に消え　嫋
頬髯を剃ってしまへば幼顔　恵
　ぐいと一杯やっと告白　町
ＹＥＳともＮＯとも言はぬ生殺し　鷺
　批准を迫る京都議定書　嫋
脇道はめっぽう狭くゆきばんば　巳
　四輪駆動で凍月を追ひ　恵
整形を重ね時効を待つならん　鷺
　ガラパゴス島夢の楽園　町
花といふこの不可思議に酔うてをり　嫋
　春の袷の半衿を替へ

法堂（ナオ）の千畳敷に蠅生るる　同
巨匠ひたすら雄渾の筆　鷺
文化財そこに居るのに無形なり　巳
どたりのたりと寝まるライオン　町
方舟に乗りおくれたるメイストーム　恵
名探偵は鬘愛用　鷺
前妻も前々妻も胸毛好き　鷺
位牌が向きを変へてゆく閨　恵
北側の縁に佇む雪兎　巳
枡掛の掌でつかむ強運　鷺
碁敵にすきを見せるな居待月　町
赤緑黄の酢漬ピーマン　嫋
イチロー（ナウ）をめざす少年体育祭　町
遺言状を書き直しをり　鷺
五線譜の木版刷りの美しく　町
ヘルパーさんはいつも早足　恵
ふるさとの花の社の鈴鳴らし　嫋
くるりと宙を切りし燕　弘

平成十三年七月十三日　首尾
於　俳句文学館　嫋

巻尺の引き足

井上　鶴鳴　捌

巻尺の引き足速し秋の暮　原田千町
　栗名月の昇りくる頃　井上鶴鳴
谺して初猟の銃試すらん　大窪瑞枝
　第三楽章ティンパニを打つ　坂本孝子
天井のステンドグラス猫もゐて　豊田好敏
　酢牡蠣肴に酌み交す酒　井上蘭石
沖仲仕(ウ)焚火を囲む荷揚待ち　枝町敏
　金のクルスに胸の毛深し　町孝敏
おぼこなることは触るればわかる女　石枝孝
　一生落ちぬ染みとなる過去　町枝孝
書架全面判例集で埋められ　敏石町
　見送られつつ帰る海亀　孝枝
後の先を受け残心の月涼し　枝孝
　いつケチャップのはねしネクタイ　町
dead or alive とみえを切る大統領
　土竜時々出てはいたづら
筑波嶺の女岳男岳も花霞
　蓬摘むなり防人の妻

操(ナオ)売る春の巷のラプソディー　孝
銀紙の上融かす結晶　石
平等院青丹緑紫鮮やかに　町
よき茶育てて流る川もや　枝
煮凝は目玉も鰓もしゃぶる癖　敏
くしゃみの度に部屋が震へる　石
気の毒なアダムスさんの片思ひ　孝
夢の中ではサド・マゾの鬼　町
ぎいぎいと孫に木馬をゆらしやり　枝
残照消えし湖(うみ)の捨舟　孝
鈴本に月ななめなり落語会　敏
放屁(へっぴり)虫よさはっちゃァ駄目　石
目(ナウ)・鼻・口彫れば南瓜の大年増　町
パチンコ情報携帯に来る　敏
若者は門前雀羅を繁昌と　枝
七段飾り雛を整へ　石
めでたさも枝の先まで花万朶　鳴
ペントハウスの窓の麗らか　石

平成十三年十月二十一日　首尾
於　緑華亭

秋天や

内田　麻子　捌

秋天や地球に戦火の痛みあり　内田麻子
葡萄たわわに白き昼月　高瀬美保
小重陽指人形で笑はせて　上月淳子
濃目に描くクレパスの線　橘朱鷺子
姉ばかり何故か茶柱立つ団欒（まどゐ）　五味蓉子
橋をくぐりて浮く百合鴎　山口みづゑ
果（ウ）大師草履のうしろ踏まれたる　淳蓉
今日の運勢星座占ひ　蓉朱
愛の巣はマンション早稲田西の隅　蓉ゑ
彼の嫌ひなパンの耳切る　朱
別れ際もう三月（みつき）よと何気なく　ゑ蓉
ゆらゆらゆれて鉢の蘭鋳　朱
滝修行嫦娥の照らす尼ひとり　蓉
遠く灯りの見ゆる山裾　保
ワープロはもう作らない部品切れ　麻
今年も化学ノーベル賞受く　ゑ
同窓会元悪童等花の下　保
鞍馬名産木の芽漬け出る　淳

さくら貝抽出し奥に色褪せず　蓉
　バイト一年いつも楽しく　ゑ
格安につられ物好き空の旅　淳
　自家中毒とかぶれ症状　保
膝を折り鼻高々と象の芸　淳
　惚れて只券モギリのネエチャン　ゑ
マフラーを靡かせバイクの二人乗り　保
　いろはにほへと後世も前世も　蓉
夢捨てず不況乗り切る己が技　朱
　いてまえ打線長打量産　ゑ
月高く昇りて楽も人も沸き　淳
　望岳楼に菊の酒酌む　朱
青松虫欅並木を席捲し　淳
　画廊の壁にピエタ複製　蓉
新品のビロードクッション置くシート　朱
　中也の詩集おぼろ繙く　保
小諸なる古城の花を愛でにし日　麻
　現れし胡蝶の超ゆる川波　ゑ

平成十三年十月十五日　首尾
於　梶が谷房連庵

梅百種

梅田　利子　捌

梅百種高楼は四方明け放ち　梅田　利子
　春月潤む遠き潮騒
大掃除捜しそこねし物も出て　坂本　孝子
　時価発行の株を買ひ入れ
長身の息子の目指すパイロット　日高　玲
　寿司パーティーの人気かんぱち
みみづくも仏法僧も同じ鳥　豊田　好敏
　千日回峰飛ぶやうに駆け
埒もなく君の視線の突き刺さり　長崎　和代
　切れて又点く恋のスイッチ
奇術師は奈落の底で風邪を引く　倉本　路子
　岸離れゆく豪華客船
絹雲の嫦娥の裾を彩りて　敏孝
　問はず語りに中汲の酔ひ
困民党起ちし秩父路落し水　玲
　童謡の碑に刻む五線譜
木の橋の真中に居て花浄土　路代
　飼育の蝶の羽化の始まる　玲孝

先生（ナオ）に引率されて知恵貰ひ　敏
　ごめんなさいと言へぬ官僚　玲
天秤に砂金と罰の揺れ止まず　孝
　切り札にするジョーカー一枚　路
鞭当てるサラブレッドは情婦の名　孝
　愛の讃歌に薔薇は崩れる　路
涸川の石の履歴を尋め行きて　同
　ざざ虫佃煮口にちくちく　玲
ふと誰もゐなくなってる雨宿り　敏
　山紫に淡き月の出　路
秋深む句敵誘ひ蕪村展　代
　栗蒸し羊羹うさぎやで買ひ　玲
遥（ナウ）かなり運動会のピストルよ　孝
　アドベンチャーに掛けし半生　同
火星にも命の証し見つかりて　代
　寝返り打てば又別の夢　路
嫁入りの姫が持参の花枝垂れ　敏
　切子の盃に雛の白酒　利

平成十三年三月九日　首尾路
於　俳句文学館

渋谷に探す

文音

梅田　實　捌

思ひ出を渋谷に探す四月かな　青木秀樹
　子雀遊ぶマンションの軒　梅田實
春炬燵兄弟ともに背が伸びて　生田目常義
　母の小言は口癖になり　樹實
垣根越し噂あれこれする良夜　義實
　秋場所初日幟はためく　樹實
鯊釣りの竿はせはしく動きをり　義實
　廻り道してびく覗く人　樹實
まつげあげお願ひといふ黒い瞳が　義實
　惚れた弱みで貸した百万　樹實
窓の外ちらと動いた影ひとつ　義實
　アニマルキャップナイフ構へて　樹實
赤富士に残る月あり湯を沸かす　樹實
　門下揃って書庫の虫干　實義
口笛はメアリポピンズそのままに　義樹
　駅弁を買ふ旅立ちの朝　樹實
艸千里花ひらひらと空に舞ひ　實義
　硝子戸越しの鐘は朧に　義

放(ナオ)哉忌海も暮れきり目刺し焼く　樹

犬に引かれて老人が来る
雨に濡れ演説会の立看板　實

シャガールをみるギャラリーの窓
この夢は悪夢はたまた正夢か　義

別れかねたる秩父夜祭
冷たい手握り返せし友の妻　樹

こころの中の鬼火めらめら
高速をスポーツカーでふっ飛ばし　實

秘湯ブームでできる新館
大皿のちらしも並ぶ月見酒　義

欧米人にじゃまな虫の音
この国の外交下手はうそ寒く　樹

喜怒哀楽のすぐ顔にでて
父さんによく似たわねと笑はれる　實

日曜日には走るＳＬ
行き合へばみな挨拶の花の里　義

なだらかな坂背なに柔東風　樹

平成十三年五月一日　起音
平成十三年七月五日　満尾　實

桃径庵の月

蒲原志げ子　捌

名をとどむ桃径庵の月やはも　蒲原志げ子
　南蛮煙管ゆるる庭先　松本碧
竈馬テレビ裏から顔出して　青木秀樹
　子役の演技シナリオを食ふ　佐古英子
絵手紙の終りの文字の跳りをり　山本要子
　独り鍛へる波乗りの板　峯田政志
トッピング（ウ）それぞれ変へて氷菓舐め　橘朱鷺子
　やめて欲しいは爪を噛む癖　碧
いつまでも男遍歴飽きもせず　英
　夢追っかけて来たのここ迄　樹
狂ひなき刻きざみゐる時計台　鷺
　修学旅行枕投げする　要
祇園さんおけら火回す下駄に月　鷺
　背筋も凛と寒行の僧　樹
文明の衝突予言ハンチントン　碧
　猿真似ならぬ猿の王国　鷺
この世をば何をあくせく花万朶　英
　家賃収入暮しのどらか　志

なすことはすべてなしたり宝貝　碧
魚拓の脇に父の落款　志
血栓にナットキナーゼ効果あり　樹
仮面はづすな口裂けの人　碧
髪洗ふ後姿を間違へて　鷺
透ける水着をぎりぎりに着る　英
隠し事ないと言ふのが嘘初め　樹
悪妻ありて育つ天才　鷺
屋根裏は節穴だらけきしむ床　志
烏賊徳利の酒もたっぷり　要
夜も更けて月は三角四角にも　樹
洋服かけに烏瓜なぜ　碧
青蜜柑むけば故郷母想ふ　要
津軽じょんがら茶パツ兄弟　英
西海岸打って走って優勝へ　鷺
小回りの利く国産車買ひ　志
賑へる古往今来花の山　げ
きぎすほろろと声を合せる　要

平成十三年九月二十四日　首尾
於　桃径庵

ゆく秋や

倉本　路子　捌

ゆく秋や新宿に聞くジョンバエズ　古賀一郎
超高層の間に浮く月　倉本路子
焼栗はほのかな温み掌に受けて　鈴木美奈子
埃を払ふ蔵書一冊　横山わこ
テロップで流しつづけるニュース読み　関口靖子
モコモコ逃げる太き茶毛虫　同
宵祭鳶の頭の胴間声　奈
金棒引の噂あれこれ　こ
初心でした甘い約束うのみにし　同
第三ダーリン角で待ちをり　奈
ボリュームをめいっぱいに街宣車　郎
醜の御楯の憂国の歌　奈
ふるさとの冬を偲びて月と酒　同
地平に消ゆる鉄路凍てつき　郎
のびてゆく平均寿命追ひかけつ　路
totoを買ひては溜めるへそくり　靖
捨つるものなき木喰の花に笑む　奈
囀止まぬ山深き村　靖

この春はフォーマルスーツよく売れて　郎
皇孫ニュース杞憂晴れたり　奈
老公はなんぢゃもんぢゃの名付親　同
納豆茶漬が大の好物　郎
ベランダの鳩に負けさう知恵くらべ　路
三枝の礼を知るや知らずや　路
籠枕しだいに魔性目覚めゆき　郎
夏痩夫に憑きし寝太り　郎
死にさうに見えぬオペラの椿姫　同
ジョギング励む人へブラボー　奈
朝月夜お邸町はしづもりて　路
修道院に絶えぬ黄落　同
醸したる貴腐のワインに果てぬ夢　郎
通貨共にしユーロ広々　郎
子らと犬駈けゆく丘のなだらかに　靖
遊覧船で巡る湖　郎
ゆっさゆっさ大枝揺るる花古木　奈
めかる蛙のまかり出る頃　郎

平成十三年十月二十日　首尾
於　新宿赤城社会教育会館

神の留守

上月　淳子　捌

神の留守社務所に巫女の笑ひ声　上月淳子
心字の池に冬枯の葛　武井雅子
寒天を作り続ける家族にて　東明雅
農事暦を煤壁にかけ　林鉄男
月の道バッグのケータイ急に鳴り　関口靖子
高層ビルを帰燕かすめる
西鶴忌このごろ人気の美術展　雅明
同じ趣味だと俄か勉強　雅
マニキュアの銀子持とは気が付かず　靖同
マンドリン弾く懐しき曲
蝉生まる腕白坊主掌に載せて　淳雅
泡盛の瓶月は鮮らか
波の音田舎芝居の客席に　男淳
歯型以外に決めてなしとは
テロの後一変したる世界地図　明淳
うまく転んで何処も怪我せず
旅の宿目口もあかぬ花吹雪　明
春雷はるか轟ける谷　靖

鐘供養信仰篤き人寄せて　明
　舌にとろける京菓子の餡　雅
うかうかと甘い話に乗せられて　男
　賣り立てをする三代目なり　淳
川沿ひを万歩計つけ早足で　靖
　夜な夜な夫にマッサージさせ　淳
新床にほのかに匂ふ冬薔薇　雅
　まんまと化けし牝狐の肌　明
鞭ならしフォンテンブロー駆けゆかん　明
　身に蘇る若き日の夢　男
肱枕やはり満月丸きなり　明
　粧ふ山の著き稜線　男
コスモスをかかへる程に届けられ　雅
　ゆっくり登る駅の階段　靖
わが国の景気動向下り気味　雅
　癌細胞と暮すのどけさ　男
よい時においでやしたと花七分　明
　もてなしにする焼きし若鮎　淳

平成十三年十一月四日　首尾
於　深川芭蕉記念館

執筆

真っ新な

近藤　守男　捌

真っ新な武蔵野の空雁渡る　八代　嫋
　昇り切ったる穂芒の月　近藤　守男
一滴のスペアミントを楽しみて　山口　美恵
　シャーペンの芯Bを選ばう　島村　暁巳
夏場所の星取り表の白と黒　登坂　かりん
　甚平羽織お揃ひの柄　同
少(ウ)しだけモデルは脚が長すぎる　恵巳
　オーベルジュにて後朝の餐　同
湖に行方定めず漕ぎ出す　嫋
　地蔵菩薩の胎の落書　ん
治らぬをいづれ治ると言ふつらさ　巳
　関西弁の軽いタレント　恵
月の影時計を呑んだ鰐眠る　巳
　討入の日をこはごはと待つ　ん
バスの窓電光ニュース皆見つめ　恵
　スタンドバーの隅は常連　嫋
舞ふほどに妖精となる花の奥　同
　笙篳篥(ひちりき)の洩るる春苑　巳

清明（ナオ）に受けてノーベル化学賞　　嫋恵

切手漁りはサンマリーノへ　　ん

散骨を遺言通り山頂で　　恵

樵の爺がふっと振り向く　　巳

隊を解きボーイスカウト小休止　　男

梅雨の晴れ間にヘアーカットを　　ん

香水の残る肌着の脱衣籠　　恵

掻痒症を共に掻き合ふ　　嫋

こっそりとメリケン・ポルノ眺め入る　　ん

データベースに出ない盗品　　嫋

おくんちの鶴の港に月の舟　　ん

藁しべ抜いて酌みし濁酒*　　嫋

美術展来賓のだす熨斗袋（ナウ）　　恵

森に帰れぬ小猿哀しげ　　嫋

三面鏡仕方話を稽古する　　同

ポーズ人形飾る雛段　　嫋

花の城角櫓より咲き初めて　　ん

大虻唸る長靴の中　　男

恵

平成十三年十月二十六日　首尾

於　くりの会

*濁酒の壜はガス抜き用に口に藁しべを用いた。

東高（ひんがし）く

権頭　和弥　捌

満月を東高く仰ぎけり　権頭和弥
　野辺に揺れゐる薄一叢　桜井つばな
秋深しトレッキングに集ふらん　鈴木タケ
　ひときは響く歌声のして　加藤哲夫
赤灯台白き水尾曳き鰹船　な
　箱眼鏡には父の片仮名　弥
誘（ウ）はれし市民大学賑やかに　ケ
　自由にならぬマウスＩＴ　夫
ふる里の自慢ばなしが縁となり　同
　絹の下着に刺繍いろいろ　な
つつましく襴宜に従ひ宮参り　ケ
　大川端に新内を聴く　夫
旅人となりてシスコの冬の月　な
　電車ちょこちょこ雪のちらほら　ケ
背番号「3」伝説の幕下りる　同
　聖戦叫ぶ突兀の岩　弥
花吹雪うづ巻く中を駈ける子等　な
　振り向く方に立ちし初虹　夫

鐘供養代々続く寺領より（ナオ）
　介護保険で足らぬ介護費
わが家ではロボット犬を二匹飼ひ
　おもちゃの医者の流行るこの頃
縄のれん焼酎の名は浪ごろし
　風鈴に描くたつのおとしご
久々に奥の細道尿前碑
　ドレスアップで軽きステップ
逞しき漢の腕に抱かれて
　目覚めてみればひとり残され
化け噺軒の端より月の弓
　ちっち蝉鳴くほっと一息
山好きな母のことなど木の実降る（ナウ）
　短靴のまま学徒出陣
ポケベルをポイし携帯ポケットに
　何時とはなしにけぶる春雨
寄り合うていも田楽の花庵
　ぶらんこを漕ぎ未知の世界へ

平成十三年十月七日　首尾
於　川口市文化センターリリア

な　同　ケ　な　ケ　弥　な　夫　ケ　な　ケ　同　夫　同　な　ケ　弥　ケ

鶴舞ひ降り

坂本　孝子　捌

晴れやかに鶴舞ひ降りて師走かな　坂本孝子
　市に並べる芽キャベツの篭　根津忠史
離島便飲料水を積むならん　日高玲
　何かにつけてものくれる友　林鐵男
出展の油彩描きあげ朝月夜　橋野代々子
　銀杏落葉の黄金色の嵩　史
鉾回すくんちの列に異邦人　代
　豊かな胸を帯が締めつけ　玲
どのへんが痒いのかなときいてみる　男
　結果どうなる道路行政　史
洞窟の核シェルターに住まゐして　玲
　玉露三煎絞る一滴　代
この猫は公案中なり夏の月　男
　積乱雲を徒歩で渡るか　史
就職の頃に刈り込む茶髪にて　玲
　尊敬できる僕の父親　同
山襖越えきし里は花爛漫　史
　惜春深し津軽三味線　代

百枚(ナオ)の連凧風を掴み取り　玲同
インサイダーに下る実刑　史同
雑居ビル怖くて酒は呑めません　玲
健康診断潮焼の肌　男
逞しき妻を持ちたる身の果報　史
隠し女に渡す引導　玲
石段の脇に錆び付く五寸釘　代
振子時計の止る雪の夜　史
スケーター　ソルトレイクを夢に見て　代
機織る辛抱いつか廃れし　史
まったりと舌に親しむ新豆腐　玲
満月落ちて流星のふる　男
植物園(ナウ)牡丹の根分け済みにけり　史
貧乏ゆすり渋滞にゐて　同
血圧は上がる売上また下がる　玲
地獄めぐりのここは入口　同
花の宴びっくり箱の蝶結び　玲
釣って驚く大き虹鱒　男

平成十三年十二月二日　首尾
於　江東区芭蕉記念館

梅雨曇り

佐古　英子　捌

名石の苔しっとりと梅雨曇り　佐古英子
　初蜩のひびく林泉　東　明雅
父と子でボトルシップを作るらん　武村利子
　コバルトに塗る地球儀の海　高瀬美保
山七重昇りし月を仰ぐ宿　内田麻子
　溢れ蚊を追ふかどの駄菓子屋　中野昌子
どやどやとべったら市の人通り
　袖引きて聞くあのひとは誰　雅利麻保
バツイチの男の翳に惹かれゆく
　ドニゼッティの愛の妙薬　麻同雅
国会は役者揃ひて高視聴
　輸出の目玉野球選手よ　保麻昌
囲み酌む鮟鱇鍋に月浮かべ　利麻雅
　低く唱へる寒の念仏　保雅
結果よし人間ドック猫ドック
　国士無双が夢の麻雀　雅
楊貴妃は花にもその名とどめ咲く
　都踊りを習ふ女紅場*

懐(ナオ)かしの古寺巡礼の春帽子　昌
森の**トロール長い髪の毛　保
居らんかね泣く児と言ふこと聞かぬ児と　雅
麺麭焼く匂ひ漂ひてくる　保
お隣のカルメン帰る蜀葵　昌
ビキニ姿で上げる嬌声　利
流眄で四方八方撫で切りに　雅
過ぎ行きなべて幻と消え　保
捨てる神あれども拾ふ神あらず　雅
ピーマン野郎と呼ばれ口惜し　英
月今宵ナナハン飛ばす全羅道　利
大漢江に遊ぶ鵲　麻
美術展話題を浚ふ自信作(ナウ)　昌
コンビニでする預金出し入れ　麻
師のリュック羊羹色に古びゐて　同
広き野原に蝶の通ひ路　保
目もあやな千家千職花の席　英
分別のゴミ仕分けする春　昌

平成十三年六月二十日　首尾
於　清澄庭園大正記念館

*京都の舞妓学校　**ノルウェーの妖精

熊谷草

母衣揺らす熊谷草のみ寺かな　式田和子
　蕚新たに風光る頃　山元志津香
ランチには針魚バタ焼き添へるらん　内山　良
　英語まじりの案内状くる　中林あや
湾岸の大観覧車月に触れ　廣田　遊
　相撲取りらが腰掛ける石　や
ニュー案山子発表会のはれがまし　良
　第二釦はもうありません　和
おづおづと絡めた指が震へてる　遊
　中央線は事故が続出　や
目涼しこっそり犬と温泉場　和
　菖蒲スケッチ奥の院まで　良
ポケットにつっこんであるミニボトル　香
　くさめ伝染朗読の会　や
変人を偉人になすも市民なり　遊
　食欲旺盛うちの婆さん　香
垂れ幕は満員御礼「花の宴」　良
　紙のコップをならべうららか　香

式田　和子　捌

オバ(ナオ)Qのゴム風船をつい逃がす
　双生児の姉妹眠る保育器
哥倫比亜(コロンビア)大学暮らし慣れたらし
　鴉が多いコンビニのそば
ちょっかいを出したくもなる朝帰り
　焼棒杭に火がついた仲
閨寒しＡＢＣＤそこはいや
　想ひ出だけで終る一生
表札に家族記せば鼻歌も
　予約の旅は豪華客船
小太りの月の兎が窓にあり
　えいっとばかりつぶす芋虫
醸(ナウ)したる葡萄今年も上々で
　壁のセザンヌ少し傾く
少年がパーマかけてる理髪店
　古跡のいはれ長(をさ)に聞きだす
山に鐘花を散らして五里霧中
　ふはりと春を巻きし綿菓子

平成十三年四月二十二日　首尾
於　伊勢原洞昌院

や良香遊同良や|和香同良や|和香遊や良和

冬瓜の

下鉢　清子　捌

冬瓜のごろりと山の日を返す　下鉢清子
穴まどひなど消ゆる夕月　東明雅
美術展得意のコンテふるひゐて　武井雅子
コーヒーブレイクワッフルを添へ　梅田利子
だるま船涼しき水脈を曳き来り　清明
遠く聞こゆる晒井の声
街道の本陣守る三代目　雅明
婿様よりも背の高き嫁　利清
南無阿弥陀良き嬰賜へと願をかけ　雅明
にやりと笑ふ壁のあかなめ　清
焼肉屋狂牛報道逆手とり　利雅
熱燗呷り六腑消毒　清利
去年今年天辺を月歩み去り　雅明
地の果をゆく旅人の夢　清
故里の結ひは健在路普請　利雅
カチンコ鳴ってロケは終りぬ　清
帽子より白鳩を出す花の下　利
菜飯茶屋にて済ます昼飯　明

春スキー思ふ存分楽しみて　同
　あっといふ間に鬘ふっ飛ぶ　雅
このところ株価上下をくり返し　利
　斜めに飾りダリの絵を見る　清
ヴェネチアで土産に買ひたる紅切子　明
　ほほゑみこぼす羅の女　雅
行きずりの一夜の恋が仇となり　利
　魔笛吹きつつ大魔神消ゆ　清
わが惚けに現代医学追ひつかず　明
　鸚鵡と会話老いの愉しみ　雅
有明の月を背負ひて茸狩　利
　籾穀を焼く煙流るる　清
爽やかに書き列ねたる半世記　明
　ノーベル賞を受けた化学者　雅
童謡碑川のほとりに立てられて　清
　やうやくうまくなった自転車　利
運び来る目の下三尺花見鯛　雅
　親猫仔猫眠る縁側　明

平成十三年十月十四日　首尾
於　光ヶ丘近隣センター

極道へ　文音

杉山　壽子　捌

杉山　壽子
青島　ゆみを

極道へまっさかさまに散紅葉　子
　狂句こがらしこれも人の世　同
酒好きな主が酒屋を別荘に　を
　四斗樽でんと据ゑて休息　同
黒塀の外はネオンの揺れる秋　子
　玉兎が跳ねてスキップをして　同
地芝居の鬘なんだか変ぢゃない　を
　夢に形を出来ぬ若者　子
拗ねるのは手練手管の聖少女　を
　ミルキー　オーラ　発信中なる　子
天に神地に霊ありて大山河　を
　焙烙鑵子端の欠けをり　同
友禅を纏ひてきりと身を捌く　子
　真名連ねて夏書清らに　を
月上げてゴルフ三昧玉の汗　子
　メリーウィドウ悪戯が好き　同
じゃじゃ馬を馴らしあげるも花の頃　を
　春の小川はさらりさらさら　子

開(ナオ)け行く関東平野霾か
　黄色の声で郊外学習
タレントも博士も味噌もはなたらし
　安本丹は風邪をひかない
一寸の光陰軽んずべからずと
　わらしべ長者藁に感謝す
角のあるもの屯する藪小路
　寄せては返す漢荒波
懐手抜く手も見せず引き入れて
　目眩のやうなキッス崩ほれ
高層に住みて後より月の友
　小鳥を追ひし夫は憩へる
芸(ナウ)術祭果てて盧生の夢が覚め
　枕カバーにイニシャルの文字
愛唱の「ピエロ」を歌ふ仲間なる
　末裔の舌空回りして
花々のかの争ひを包みてよ
　アナタのわたしの国に孫生

平成十三年七月二十日　起首
平成十三年七月二十七日　満尾

を子を子を子を子を子を子を子同を同子を子を子を子を子

秋彼岸

鈴木　慎二　捌

秋彼岸手桶に赤き実のこぼれ　鈴木慎二
初月仰ぐ束髪の人　篠原達子
相伝の小鰭の鮨を漬けこんで　大島洋子
熱帯樹林割り箸となる　鈴木千恵子
車座に一言居士を招き入れ　八代嫋
換気の窓にどっと北風　近藤守男
ゴール決めサッカー少年Vサイン　山田美代子
即購入のコスメ新色　中川真紀子
恋すればいつも女は五つ星　洋恵
てれんてくだの鉄人の技　紀
夏蝶の連なりて行く草千里　男
ピエロ素顔で汗を拭へる　同
神主が雨乞ひしてる月のダム　達
飯場の休みおいちょかぶにて　嫋
馬の足またも引受け町長さん　男
BSTV画像鮮明　代
銀の盃ファドの夕べの花に酔ひ　洋
メフィスト集ふ春荒のロカ

人の世の栄枯盛衰山笑ふ　惠
　ＩＴ呪ふ父の戯言　代
米百俵とんだ所で持ちだされ　二
　空港閉鎖宿に足留　紀
年の差の溜息もまた媚薬なり　嫋
　紫煙のゆくて燃えよジェラシー　洋
沖はるかにらいかないのあるといふ　達
　おばあさんからもらふおはじき　嫋
満月に志ん生談義きりもなく　紀
　帯に染めたる刈萱の柄　洋
みちのくに冬の支度のはじまりし　達
　在来線の今もシュシュポポ　嫋
落し文バルビゾン派の筆の冴え　代
　どこに消えたの二千円札　洋
形見分け古物商価値つけ難し　紀
　嘴太鴉しきり鳴くなり　達
真祝の肩に散りゆく花の翳　二
　海市の先に見え隠る夢　惠

平成十三年九月二十四日　首尾
於　桃径庵

―桃径庵和子宗匠追悼―
われも風羅の

鈴木美奈子　捌

秋彼岸われも風羅の旅ごころ　鈴木美奈子
　月に澄みゆく玻璃の文鎮　鈴木了斎
小鳥らは珊瑚色の実啄みて　浅賀丁那
　自転車のベル替へてみようか　島村暁巳
焼きたてのバケット籠に二・三本　中村ふみ
　へのへのもへじ甚平を着る　棚町未悠
噴水（ウ）の向かふにひょいと知った顔　村山加津枝
　そのネックレス誰にもらった　巳
あの頃は子宮作家と蔑まれ　那
　法話を聴きに寄せる人並　斎
ふはふはと甍を越えてしろばんば　那
　テニス壁打ち冬の暖か　み
習ひ事オンパレードの三歳児　枝
　お菓子の街にひとは住めない　巳
彷徨へる湖はるかなり絹の道　悠
　乾ききったる驢馬の鼻先　那
塹壕に月と散り込む花吹雪　斎
　春暁充たす一睡の夢　み

泥棒(ナオ)を捕らへてみれば田螺にて　　那
　こぞりて啜るけふの味噌汁　　斎
合宿のいがぐり頭声太し　　み
　帽子掛けには赤いキャップも　　那
ポルシェにてホームに急ぐ鍼医師(はりくすし)　　悠
　芸妓廃業扇振るまふ　　枝
船遊び橋くぐるたび添ひ添はれ　　巳
　奴の匂ひが染みた片腕　　斎
独酒デュプレのチェロはアダージョに　　悠
　シャモニーの邑蔦紅葉して　　那
夕月に大き伸びする宣教師　　巳
　霧の霽れれば柩運ばれ　　那
ちちろ虫肩に飛び乗りポケットへ(ナウ)　　悠
　頬にほのかな電球の熱　　斎
玄関の鍵をふやして終の家　　み
　大正浪漫(ロマン)鼻緒別珍　　奈
花びらのふんはり坐るふらここに　　枝
　雛の調度四つ菱の紋　　み

平成十三年九月二十四日　首尾
於　桃径庵

道の駅

副島久美子　捌

粧へる山に囲まれ道の駅　副島久美子
光ゆたかに昇りくる月　百武冬乃
ア・ラ・メゾンオリーブの実を取り分けて　佐古英子
ダークスーツがちょっと窮屈　山口美恵
口髭を伸ばし始めた署長殿　倉本路子
お堀の鴨に餌をやる子等　伊勢本如代
逃げて来た鬼が会釈の節分会　同
取材クルーはコード引きずり　同乃
脚長きあの娘のサイズ目で計る　同恵
十七歳の魅力ぴかぴか　同路
観覧車宙ぶらりんの箱の中　同
IT都市を襲ふリストラ　同乃
月涼し草食動物反芻す　同恵
麦酒を飲んで流す結石　同路
爺さまは遊びやせんと永らへて　同如
天鈿女のタップ誇らか　同恵
花色の吐息充満花の下　同如
初鮒を釣る銘入りの竿　同英

春疾風(ナオ)あれよあれよとお札飛ぶ　英
　メアリーポピンズ傘をおちょこに　恵
角ごとに保育園児を配るバス　如
　犯人納得うまき似顔絵　英
静まりて野辺地果てまで雪明り　路
　埴輪が抱く縄文の夢　乃
身じろがぬパントマイムに吠える犬　恵
　アオザイの裾緑蔭を行く　英
じれったいもう一押を待ってるの　如
　ツボと言ふ語の翻訳は無理　恵
ストレッチ飽きずに励む月の窓　路
　蓑より顔を出した蓑虫　同
文化祭(ナウ)焼鳥団子手風琴　如
　小澤を迎へウィーン湧き立つ　恵
蒐集のパイプを磨くつれづれに　乃
　反魂丹の効きめ信じて　恵
今年また更地に開く花一樹　英
　無人スタンドかぎろひの中　久

平成十三年十月三十一日　首尾　乃
於　東京ウイメンズプラザ

一の酉

染谷佳之子　捌

やはらかく靄の立ちをり一の酉　染谷佳之子
担ぐ熊手に笑まふお多福　倉本路子
ローリエをずんどう鍋にさぐりゐて　長崎和代
クイズの答送るファックス　篠崎達子
ぽっかりと行合の空月浮かび　竹田登代子
真赭の芒なびく川岸　山本千代子
運動会リボン作りに精を出し　登和
タイトスカートにあふ先生　同達
忍び逢ふ非常階段そっと踏み　千路
もう何年も適温の仲　達千
たてがみは風の形に馬の像　路和
ねむりたいだけ眠る休日　達千
月涼しさいころの目のつきにつき　登路
炮烙灸で焦げる脳天　路登
蘇る聖戦という語のひびき　路和
もぐら叩きで遊ぶ子供ら　千路
シャンパンをポポーンと抜いて花の宴　和千
長春はいま春炉焚く頃　路千

めかりどき手話のおしゃべり果もなく　千
こんがらがってほぐれない糸　登之
引きぬいて瞬時に姫が鬼女となり　路
胡麻の煎餅ばりばりと食ふ　達
冬籠ネヂ巻き直すオルゴール　千
来週からは兎当番　登
できちゃった駆け込んできた孫娘　達
とっちゃん坊や中々のもの　路
口癖はあっしにかかはりござんせん　同
修理代より買ふほうがまし　和
有明月窯出しを待つ伊賀の里　登
青松虫のすだく街路樹　達
大部屋の隅でどぶろく回し呑み　和
殺陣が上手で主役張る夢　登
マウンテンバイクで下る急カーブ　千
記念切手に消印の濃き　之
ふるさとは花の中より鳥のこゑ　千
めばるの煮付祖母の好物　登

平成十三年十一月六日　首尾
於　新宿生活センター

執筆

小春凪

橘　朱鷺子　捌

弧を描く海坂遥か小春凪　橘　朱鷺子
冬の鴎に投げるパン屑　蒲原　志げ子
教科書のお古ばかりを捨てかねて　式田　和子
折り紙を折る子のひとりごと　田村　満子
草野球出場祝ふ宴に月　橋野　代々子
夜来香のかほり漂ふ　本田　弥生
虚栗殺陣師となって生き残り　和志
貢ぎ貢ぎし陰の存在　生
それぞれの涙結婚成就させ　満
お守り疲れのドンは退任　代
絶壁にノイシュバンシュタイン城聳ゆ　満
蜘蛛の囲かかる黒き森林　和
新発意は月に夏書の墨を溜め　代
十七歳なり非行少年　生
フリースのモンスラシルバーファッションに　志
自然が宜し無理は禁物　同
花に問ふ幾星霜の盛衰を　代
犬にお座り躾けうららか

鐘楼（ナオ）の音色さまざま復活祭
　ネイルアートをめざす勉強
この料理ゴム手袋の労作か
　味も素っ気も失くす滅菌
湯婆の優しき温みなつかしむ
　そっと肩寄せ除雪待つ駅
ケータイにＮＯとも云はず切りもせず
　死んだふりにて凌ぐ難関
父説教孔孟老荘唯正座
　恐竜揃ひ何の相談
月明り土器を掘る人埋める人
　粟稗黍を再度見直す
新（ナウ）走り一っ走りに酒蔵へ
　身体のツボを捜し押せ押せ
巡業に場所座布団を引っ担ぎ
　老いの夢にも宇宙遊泳
手塚治虫読み耽るとき花の散る
　遅日の椅子に置かる水筒

平成十二年十二月六日　首尾
於　鎌倉おんめ様

生満志和代満和志生満和志生満代和朱生

秋の虹

指差すにはやも消えゆく秋の虹　田村満子
けふ十七夜立ちて待つ庭　橘朱鷺子
大図鑑蜻蛉の種類調ぶらん　橋野代々子
新期初売コンビニの棚　蒲原志げ子
アルバイトやっと言へますありがとう　本田弥生
いつもの席に座る釣堀　満
色褪せし麦稈帽子手放せず　朱
隣のバッグに着信のベル　生
ポマードの香の彼が大好きで　代
如何物喰ひと恋の定評　げ
はばからず信号待ちの熱いkiss　満
読経続ける托鉢の僧　朱
凍鶴の片脚しまふ月の影　生
温突利きしアリランの家　代
爪切りもダメと空港セキュリティ　げ
がき大将も今は昔に　満
勘九郎忠信権太花盛　朱
遠山霞む村の夕暮　生

膝送り

ネット際サーヴ決りて風光る（ナオ）
健康志向過剰症群
くり返し「猫踏んぢゃった」婆が弾く
百物語揺るる燈芯
残りもの福があるかと冷蔵庫
洗剤不要洗濯機買ふ
帯襷みんな足りない奴ばかり
うぬぼれすぎてつひにこの齢
青髭のハーレムいまや満杯に
整理整頓いつも清潔
端正の月も映して水鏡
熟れし柘榴の並ぶ店先
重陽（ナウ）を祝ひ蒔絵の椀を出し
屋敷神在る故郷恋しき
試験日の電車遅るる夢の中
茶柱立った株は買ひ時
花に酔ひ酒は一斗ぞ山頭火
史跡巡りのうららかな列

平成十三年十月三日
於　鎌倉おんめ様

代げ代生朱満げ代生朱満げ代生朱満げ代

蘭の秋

豊田　好敏　捌

責了を終へて迎へる蘭の秋　豊田好敏
後の袷の柄の装本　式田恭子
いつしかに月まろくなる森蔭に　中川哲
少年の唇銀のフルート　永島靖子
学園のグラウンド均す人見えて　登坂かりん
はぐれし蟻も列に追ひつく　中川凡
弁当に色あざやかな豆の飯　吉村ゑみこ
目をつぶり聞くニコライの鐘　哲ん
かしこかと訪ねてみれば美しき女　恭
抱き合ふ前に落とすお白粉　凡
酒ならば二杯かぎりと決めてをり　ゑ
やくざ役者も今は名優　靖
月光の大川凍ることあらむ　ゑ
寒蜆とる舟のゆうらり　恭
アメリカに蝙蝠などと言はせるな　靖
危機一髪を告ぐる携帯　凡
仇討ちに助太刀せんと花吹雪　ん
古今雛やら観せる豪商

ガウディ(ナオ)のベンチくねくね春の午後　ゑ
　ことりと掛けた尻に画鋲が　哲
おしおきに耐へて忍んでつくす恋　凡
　良縁御縁血筋優先　恭
祖父が読む候文の夏見舞　ゑ
　今年ビキニは水着全盛　靖
核実験隠す国々恐ろしや　ん
　どこにあるのか人の真実　恭
山越えてまれには訪はむ生身魂　靖
　鬼灯ばかり供へゐる月　恭
鈴虫のちゃっかりとまる下がり壁　ん
「バーイ」手を振りバイク飛び出す　ゑ
若夫婦(ナウ)湯冷めする間もいとほしく　凡
　垢舐めなぞは嫉妬ぼろぼろ　哲
九段から三田へ引っ越し済ます爺　ん
　あられ浮かせし昆布茶振る舞ふ　哲
メビウスの輪にもなぞらふ花の雲　ゑ
　紙風船とまろぶ黒猫　敏

平成十三年九月二十四日　首尾靖
於　桃径庵

黒南風や

長崎　和代　捌

黒南風や幸も不幸もなき齢　長崎和代
　でんでん虫と睨めっこする　今宮水壺
パソコンのホームページのトピックに　古賀一郎
　ショップに並ぶくにの名産　村田冨美壺
久闊の握手がっちり月の下
　酒くみ交したぐる新蕎麦　美壺
おウくんちのしゃぎり切れぎれ聞えきて
　はねっかへりが三つ指をつく　壺郎
お見合ひの会席料理通になり　美壺
　飛車を取らうか角を取らうか　郎壺
銀行の合従連衡すさまじく　郎代
　街ねり歩く聖者の行進
月の出て押しくら饅頭ちりぢりに　郎壺
　大正昭和経たるねんねこ　壺美
鶴ご機嫌いかが竹の園　美壺
　割り子の飯に箸休めたる　壺美
花の降る走り根しるき鞍馬山　美壺
　春ショールにも具象抽象　壺

のどらかに拍手を送る大道芸　壺郎
酸っぱい想ひ唾で飲みこむ
裁判で負けて負けぬとビル・ゲイツ　郎美
身を翻し夏のつばくら
蚊やり火の舞台稽古はたけなはに　郎和
茶髪金髪なかの黒髪
巴里六区屋根裏部屋の昼下り　郎壺
取りも敢へずにソファーの極楽
ランドリー今日は多めのご注文　郎和
そろりそろりと渡る吊橋
すり乍ら母懐かしむとろろ汁　郎美
座敷わらしが月に浮かれて　和郎
アパートがマンションとなるそぞろ寒む　同壺
広沢虎造CDで聞く　郎美
つぎつぎと獏に食はせし夢数多　郎美
森林浴に友と連れ立ち　郎和
花吹雪ひねもす海になだれつつ　執筆和
小径に憩ふ蜂を飼ふ人

平成十三年六月十七日　首尾
於　新宿赤城教育会館

皇女誕生（みこ）

中田あかり　捌

皇女誕生冬うららかな芭蕉庵　中田あかり
敷松葉なぞ直す坪庭　登坂かりん
豆腐屋の馴染みの声を呼び入れて　日高英二
IT練習夢中なる父　東明雅
マンションのリビング照らす月の光ゲ　武井雅子
ふらりと軒に下る鬼の子　雅
馬市（ウマ）に売られゆく馬かはいそな　ん
背伸びしながら撫でる赤い毛　り
コギャル達皆モー娘（ムス）。になるつもり　雅
洒落のわからぬ理科の担任　二
志ん朝の手踊りしつつそでに消ゆ　り
地酒さまざま貯へる蔵　子
見たやうな河童談義に更ける月　二
修験衆徒ら勇む夏籠　ん
過疎の村猿は座敷で最中食ひ　子
幾山越えて放浪の果　雅
花屑を挟む手帳の湿りくる　ん
油南風受け乳母車押す　り

煙突が煙い煙いと揚雲雀（ナオ）　雅

魚河岸はてて湯屋のにぎはひ　二

ジプシーに銀貨やりたる次第など　り

黒き瞳の何を見つめる　子

幾夜さの逢瀬も謎の深まりて　ん

罠を仕掛けて恋戻り川　二

煖炉には薪の次々はぜる音　子

サナトリウムに惜命の人　雅

囲碁将棋俳句短歌とほしいまま　ん

秋の袷をはんなりと着る　り

十三夜仰ぎて偲ぶ明治の世　雅

味良く煮えた栗に山芋　二

バンガロー（ナウ）寿会もお仲間に　り

自家発電の灯し眩しく　子

やうやうに太極拳の様になり　二

向ヶ丘に緑酒玉杯　ん

少年よ大志抱けと花の下　子

肩のあたりをとんでゆく蝶　雅

平成十三年十二月二日　首尾

於　江東区芭蕉記念館

於母影も

中林　あや　捌

於母影もしばらく秋の袷かな　中林あや
帰る燕のよぎる夕月　青木泉子
ゐのししのハムありますと店先に　山口美恵
指差しだせば顎で応へる　今宮水壺
すべりこむ中世美術の初講義　池田やすこ
夾竹桃がびっしりと咲き　難波さえこ
油照りアルファロメオが高速へ　花巻珠枝
ファーストネームうつむいて告げ　恵
秘密持つ日記はまるで暗号文　枝
親の心配みんな空振り　こ
BSはイチローあらら大あばれ　さ
鯨ぐらりと海をゆるがす　泉
雨後の月闇汁にほふ通り裏　こ
づきづき痛む掌の傷　さ
ゴルゴダの丘に祈りのきりもなく　恵
バス止まるたび増えるスタンプ　泉
小気味よし無冠の爺が守る花　壺
蜂の羽音が誘ふまどろみ　こ

ゆったり(ナオ)と浮かぶ弥生のちぎれ雲　さ
拳玉の腕ぐっとあげたね　泉
またぞろの器用貧乏閑職に　壺
電子レンジで「七笑」チン　こ
べんがらの色もモダンな郭町　や
戦後生れは妙に大胆　さ
うっすらとうなじの窪に汗を溜め　恵
あんな女に惚れぬいた夏　枝
クリックし貼付け削除エトセトラ　泉
修復了へる阿弥陀三尊　恵
月細きまだ陽を残す交差点　さ
トロンボーンを爽やかに吹く　同
遠来(ナウ)の客を迎へる松手入れ　泉
記念写真はちょっとぴんぼけ　枝
ポケットの古いレシートまさぐって　こ
論語の素読朝っぱらから　枝
散り残る花いよよ濃き山の牧　壺
キャンペーンらし風船が飛ぶ　や　枝

平成十三年九月二十四日　首尾
於　桃径庵

歌仙・擬　海亀や

原田　千町　捌

海亀や沖のどこかに玉手箱　原田千町
童謡聞いて眠る籐椅子　登坂かりん
新刊本キオスクの棚並べゐて　橋野代々子
またちょっとだが溜るへそくり　関口靖子
名月に母に教はるうちの味　若林文伸
蟷螂みつけかまふ三毛猫　同
地芝居に外国人の大喝采　ん
君の仕草が残像となる　伸
メル友がトゥルー・ラブへと変はる率　ん
かちりと鞘に戻す匕首　伸
網元の器量で交はす小盃　代
八トントラック地響きを立て　同
冬銀河何時も鞄に聖書あり　靖
攻防しきり盤の底冷え　代
ラーメンの長蛇の列の最後尾　靖
十字路右へ矢印の立つ　伸
住職の賞で咲かせたる臥竜梅　ん
ボレー聞ゆる暮れ遅き頃　伸

志賀直哉（ナオ）読みふけりをり弥生尽　　ん
　こっくりさんが流行る校内　　代
草原にＵＦＯ薙ぎし跡しるく　　同
　無くした物の発見はまだ　　伸
国変へんこの名歴史に残るほど　　代
　おぼこ見初める鷹狩の殿　　同
掻巻のなかにとろける白い肌　　靖
　ショートケーキの舌に優しき　　伸
理想郷あの山越えて谷越えて　　ん
　死神がまだ立ってゐる門　　代
御精霊様この火渡っておいでなさい　　ん
　指先で揉む赤いほほづき　　靖
医師作家賢兄愚弟新走り　　伸
　石組みの滝皓々と月　　靖
新都心夢を孕みて息づけり　　代
　キャリアが頼る街の占　　町
けふ着れば花見衣よ薄茜　　靖
　匂ひ菫が籠に一束

＊歌仙・擬　一花二月。正花はナウに一本のみ、初折の花は正花でなく梅椿その他の春の花で。月は各折に一つ、素秋でもよいが一つは秋の月を詠むこと。

平成十三年七月朔日　首尾
於　江東区芭蕉記念館

聖樹

東郁子 捌

東郁子

児の熟寝（うまい）小さき聖樹の点滅す
　暖炉を囲み集ふ人々

桑原美津子

貨物船吃水深く航くならん
　自慢のパイプいつも離さず

下鉢清子

おもむろにワインを出して月見酒
　丘の真上を雁渡る頃

武井雅子

通草（ウ）蔓編む背をまろめ秋乾く
　男の前で使ふ紅筆

椿照子

二股をかけて恋路はままならず
　大売出しの旗がひらひら

郁子

このところインターネットに熱中し
　登山断り籠城の月

津

ごきかぶり翅のてらりと打たれゐて
　命乞ひするテロリスト達

清

飛行機の客はめっきり減少す
　どこからとなく六段の曲

雅

袖だたみしておく母の花衣
　「夢」の掛軸白藤を活け

照

郁

清

津

かぎろひの野にホームラン弧を描き　雅
　みちのくの旅友と道連れ　照
心眼で描きし釈迦の十弟子図　郁
　昔懐かし拳骨飴の味　津
太葱を積んで畦来る猫車　清
　腰痛予防重ね着をせる　雅
忍ばせるハイネの詩集懐に　照
　地の果てまでも彼の跡追ひ　郁
許されていっさいはづす身の飾り　津
　郵便受けにどさとカタログ　清
月の射す三代続く佃煮屋　雅
　家族揃ってすする新蕎麦　照
冬隣り溜る写真をもてあまし　郁
　キックボードで遊ぶ子供ら　津
繰り返す龍頭蛇尾の改革論　郁
　馬耳東風と聞き流す老　清
花の雲熊本城の天守閣　雅
　ふらここ揺るる日曜の午後　照

平成十三年十二月九日　首尾
於　柏市光ヶ丘近隣センター

恋歌を

日高　英二　捌

恋歌を冬薔薇ゆゑに歌ふかな　日高英二
　時雨の匂ひのこる黒髪　日高玲
ブロンズ像獣性の眼の鋭くて　島村暁巳
　ポリスボックス交替のころ　近藤守男
月は海自慢の竿を撓はせん　秋山志世子
　しきりに星の奔る西空　中野昌子
行く秋のストーンヘンジの影長く　已男
　見え隠れする兵の一団　玲
お尋ねになってゐるのはこの井戸か　志
　吊上げられる賞金の額　玲
さっぱりと売れぬ娘に手を焼いて　已
　今日も早めにすます打水　已
裏梯子扉を押せば夏の霜　昌
　サイレン止めて救急車くる　男
仮病にはかの病院のかの先生　二
　井伏鱒二の語る荻窪　已
花の下踊り上戸の安来節　男
　虻と呼ばるる債鬼にこにこ　玲

お遍路（ナオ）の杖つく中に紛れこみ　　男
　招き猫にも念仏するなり　　二
銭湯の一番風呂に沈む爺　　昌
　航空券はいつも特等　　志
豚の鼻トリュフの山を嗅ぎ回り　　男
　身を乗り出せば紺碧の海　　巳
そのままに飛び込む君を波に追ひ　　二
　夢のごとくに水母交はる　　昌
助監督フィルム・ラッシュに眼を凝らし　　男
　衣装合せの襴宜の直垂　　志
千年の千木鰹木に月細く　　已
　派手に塩撒く村の大関　　昌
秋出水（ナウ）ごっそり家の流されて　　玲
　世話になったと屋根で辞儀する　　二
だみ声のマイクに拍手ぱらぱらと　　男
　居残りでする図画の宿題　　志
お帰りと母に抱かるる花明り　　玲
　篭いっぱいの蓬山独活　　執筆

平成十三年十一月二十日　首尾
於　世田谷区羽根木公園　星辰堂

蓑虫の

佛渕　健悟　捌

蓑虫の音を聞く空の蒼さかな　佛渕　健悟
紙の月折る文机の冷え　椿　紀子
ままかりの酢漬けの旨き頃ならん　中野　昌子
転校の子に友達が出来　秋山　志世子
河川敷ピップホップを教はりて　高橋　豊美
噴水の中抜けて駆けだす　古賀　一郎
七年の眠り破って生るる志士　間　佐紀子
丸山楼で公法を説く　紀
繭玉の紅より紅き唇に　同
木責のこゑのやれ面白き　豊
掛声はあれど実の無き兜町の午　郎
親子丼伝説の味　豊
正覚坊陸をめざしてひたすらに　世
またそら耳にひびくララバイ　昌
アルプスの風に吹かれて揺らす椅子　佐
雨後の斜面を駈ける乳牛　世
月の下花散りかかる道祖神　郎
春のスカーフポケットに入れ　紀

一族（ナオ）にみどりごのゐてあたたかし　昌紀
巡る盃塗りも素焼きも　郎
こわだかの柳田国男研究会　郎悟
河童の爪の黒光りして　郎
無残やな水着は嘘をつけませぬ　昌豊
馴染んだものがやはり最高　郎紀
ぷかぷかとパイプの煙輪を作る　同佐
八丈島の暮れて平らか　郎
両三年姿を見せぬ赦免舟　紀同
双眼鏡で探す火の鳥　世
月よりの使者の連れだすかぐや姫　紀
鬼の子はらむ噂かしまし　昌同
てのひら（ナウ）で新豆腐切る母在りて　昌
働くことは癒さるること　紀
砂漠よりビデオテープで来る旅信　悟
黄衣の僧の東への道　佐
花よりも歌に親しき峡の村
夕餉の菜に摘みし水芹

平成十三年九月二十四日　首尾
於　桃径庵

曳舟

本田弥生

新涼の運河に舟が舟を曳く　本田弥生
　行合の空浮ぶ昼月
ガラス卓紫苑一茎活け了へて　橘朱鷺子
　待つ人来ずに宅配の便
打ったらし歓声の湧く草野球　橋野代々子
　てんとう虫の服につきたる
ケイタイとソフトクリーム持て余し　蒲原志げ子
　手漉きの和紙に仮名書きの文
銀幕の憧れのひと三枚目　田村満子
　ホストクラブの売れっこの彼
外務省首切り旋風吹き荒れて　小原正子
　計り知れない税金の無駄
達磨忌の差し込む月に座禅組む　鷺正代
　ごったに混ぜる闇汁の宴
賑やかなおばさんの群れ歩き連　満げ
　寄ってらっしゃいお代後程
花の頃別れ出合ひもいかばかり　鷺正生代
　ただぶらんこの揺れる園庭　満げ代

神社（ナオ）ごと引越をして春祭
湖底の村を忘れかねるる
マンションの最上階に弾くピアノ
飾り棚には木乃伊・宝石
砂嵐外人部隊行く炎昼
恋を占ふ巴里の裏町
助手席の彼女と熱き抱擁を
とたんに覚めて枕悲しき
防災の訓練なるに身が入り
肩こり腰痛ボスの泣面
端正の月かかり居り離れ山
糸瓜水とる透明な壜
ひよどりを追ひかける猫（ナウ）叱りつけ
代代継いで鳴らすカリヨン
寄せ通ひ背に負ひたる老師匠
見て来たやうな嘘も方便
大杯に花びら浮かべぐいと干し
居眠りをする風車売

平成十三年九月五日　首尾
於　鎌倉おんめ様

正生げ鷺満正生げ代げ正代鷺げ満代同鷺

桃径庵の涙石

文音　本屋　良子　捌

緑陰や桃径庵の涙石　本屋良子
　姿なけれど夏の鶯　船渡文子
カンバスに残る張りしろ折り曲げて　松尾博雄
　眼鏡を吊すシルバーチェーン　瀬尾千草
はるかなる古城に仄と月明り　文
　ある決意して小田を守る人　良
正客を茶器のことなど風炉名残　草
　時々刻々と約束のとき　雄
気がかりは三面鏡の頬の痣　良
　珊瑚の赤が魔性めく宵　文
山門に金剛杖の仁王立ち　雄
　けふは売り切れ湯豆腐の店　草
冬月に酒と寝袋ひとり旅　文
　象と麒麟はポケットの中　良
イソップの本開かれし子供部屋　文
　いがぐり頭こくり頷く　雄
眼閉ぢ花の呟き聞きつづけ　草
　春の障子の日差し柔らか　雄

お遍路（ナオ）さんハンドバッグに千社札　良
　海の幸積む男らの夢　草
東印度会社の印つけし壺　良
　カスタネットの音の昂まり　草
告白の何とも汗の逆台詞　文
　羅の肩強く抱き寄せ　良
診断は骨粗鬆症エトセトラ　雄
　バレーボールは婆のホビーよ　文
抜群の技かいま見る囲碁の席　雄
　式包丁の儀式ゆかしく　文
ふうはりと秋の螢の月を呼び　雄
　露に濡れたる石のくろぐろ　草
これ旨かと籠いっぱいに初滑子（ナウ）　良
　壁に貼られし孫の似顔絵　草
死ぬまでになすべき事はなし給ふ　雄
　雪代山女跳ねる小流れ　良
幾万の花の句散りて花新た　文
　見上ぐる空に朧なる星　雄

平成十三年六月五日　起首　草
平成十三年六月十五日　満尾

源心

良夜かな

金久保淑子　捌

潮入の池のふくらむ良夜かな　金久保　淑子
穂の揃ひたる薄ひと叢　副島　久美子
爽やかにファッション雑誌広げゐて　梅田　利子
ポップコーンをきりもなく食ふ　秋山　志世子
しんしんと雪降り積もる旅の駅　倉本　路子
彼の真似して樏をはく　八角　澄子
袖すこし引けばずずっと抱かるる　利路
首のほくろを今もわすれず　利
押し寄せる不況の波に店じまひ　利世
ワッシワッシと熊蝉の声　久
長崎は海からすぐに山となり　澄
進水式の纜を断つ　利
校庭の花に集ひし同期生　久
遥か黄砂にけむるビル街

亀鳴(ナオ)くを待つといふ人うすら惚け　路

特許許可局よどみなく言ひ　澄

オーディションずらりと並ぶ審査員　利

トラック野郎夢を追ひかけ　路

熱燗に酔ひて屋台は盛り上り　久

多産系なりまたも妊る　世

四人まで娶るをゆるすイスラム教　利

テロの黒幕岩窟の奥　久

踏み込める蛇の寝莫蓙に月の射し　澄

年甲斐もなく汗疹つくりて　久

ベルリン(ナウ)で尚子が出した世界新　世

次々に翔つベランダの鳩　澄

正午告ぐ時計の小人花を浴び　淑

手をつなぎゆく母子うららか　路

平成十三年十月一日　首尾

於　源心庵

雲間の月

久保田庸子　捌

母を呼び雲間の月を待つ今宵　壱岐幸子
卓に活けゐる庭の水引草　木暮淑子
湖ほとりあきつの群の飛び交ひて　加藤さくら
裾広やかに高高と山　小阪博子
たまさかにホールインワン叶ひたるウ　久保田庸子
アイボに「お手」を特訓中なり　稲葉建子
寄り添へる影をぼかして冬霞　ら
寝化粧淡く炉明りの女　庸
諤諤と緊急会議永田町　建
洞窟深く消える靴音　幸
父作る紙飛行機の旋回す　ら
天気予報に一喜一憂　幸
三段の蒔絵のお重花の下　淑
旧街道にうぐひすの声　幸

春(ナオ)の風邪やっと癒えたる駐在さん　庸
行者にんにく通販で買ふ　建
大入りの宗家譲りの七変化　ら
築地塀より猫しなやかに　同
屋久杉に停ちて霊気をほしいまま　博
氷室を守り曼鑠と月　建
差しのべる二の腕日灼け頼もしく　幸
ピアスを付けぬ君が可愛いい　庸
国中の夢を集めてプリンセス　ら
肖り商法売出しの店　淑
円(ナウ)空仏笑ひ顔にて在すなり　建
坊っちゃん団子食うて旅果つ　博
花見酒寮歌を永遠に歌ひ継ぐ　庸
スカーフ靡き風光る頃　ら

平成十三年十月六日　起首
平成十三年十二月八日　満尾
於　港区勤労会館

雪迎へ　文音

桑原　美津　捌

汐騒の遠く聞く日や雪迎へ　桑原　美津
　玻璃の窓々照らす月影　吉村　ゑみこ
秋茄子を煮びたしにして食べるらん　吉藤　とり子
　路上にならぶアクセサリー買ふ　山田　喜美枝
ウメンバーは去年と同じの杜氏達　ゑと
　卒業写真めくる炬燵で　枝ゑ
再会の君の一際艶めきて　と津
　むらがる男誰が本命　枝ゑと
休みにはディナークルーズセーヌ川
　何より嬉しのんびりの風呂
粗大ごみ無理して出して腰いため
　木造校舎明治館てふ
久しぶりうからの揃ふ花の下
　お婆夢見る陽炎のなか

若駒（ナオ）に声かけながら鞍つける　ゑ

グルメ本見て腕振ふ午後　と

庭の隅常盤木落葉山をなし　枝

句帳広げて唯眺めゐる　津

好きだよと言った背中で舌を出す　ゑ

喧嘩はいつも寝間でお了ひ　枝

突然の直下地震は何やらん　と

少し綻ぶ丹前の袖　枝

サラマ湖に氷鏡くっきり寂として　ゑ

一反木綿ひらひらととぶ　と

日（ナウ）の丸の弁当昔むかしなり　津

大正琴の華やぎの音　と

篝火を消した舞台に花の散る　枝

絵凧泣きべそ梢でふるへる　ゑ

平成十三年十月二十九日　起首

平成十三年十二月五日　首尾

五日月

小池　啓子　捌

五日月雲に吸はれし埠頭かな　小池　啓子

波のまにまに浮かぶ初鴨　風間　克子

青磁皿剥きたての梨供されて　難波　さえ子

お隣で弾く子どもバイエル　啓

ペチカ燃え泰西詩集拾ひ読み　克

なにかつぶやく助手席の君　啓

心臓が好きだ好きだと打ってゐる　克

孵化のはじまる腐植土のなか　啓

地図になき村にゲリラの訓練地　克

親戚中に輝石おみやげ　さ

涼風の庭づたひする奥座敷　同

大入道の下駄ひとつだけ　啓

篝火の火の香の荒き花の夜　さ

ハーブを添へる鰆ムニエル　啓

亀鳴(ナオ)いて床屋は髪を刈ってゆく　同
高橋尚子記録破られ　林
じりじりと地盤沈下のすすむ国　鉄男
家出の猫をさがす寒雷　鉄克
逆縁となるかもしれぬ癌告知　鉄啓
思ひの丈をつづる恋文　克
ほほゑみの貴夫人像の永遠に　啓
ゴスペルかけて乗ってるＤＪ　克
うづ高く積むビール樽月昇る　啓
紙魚ついてゐる古い伝票　鉄
襷(ナウ)がけ声も凛々しき刀鍛冶　啓
ポストペットを肌身はなさず　鉄
花吹雪白河の関まなかひに　克
野面はるけく種を蒔くひと　啓
　　鉄

平成十三年十月十三日　起首
平成十三年十月二十七日　満尾
於　新宿滝沢談話室

ＩＴ革命

篠原　達子　捌

ＩＴ革命わがことでなし蝸牛　篠原　達子
軒に吊るせるどくだみの束　長崎　和代
駅伝の先頭走者みえてきて　竹田　登代子
わたる鉄橋ざざ波の立つ　倉本　路子
芋庵（ウ）出づれば皎と伊那の月　路
林檎農家に嫁の来るそな　登
さはやかなヘソ出しルック可愛らし　和
隣の犬に鼻を舐められ　路
給食に招いてくれし一年生　同
棚に縄文土器のレプリカ　和
地の底にマグマ真っ赤に燃えてゐる　登
まだ帰れない故郷の島　路
ふり仰ぐ千有余年の花大樹　同
春の山菜宅配にして　和

宰相（ナオ）の行くも行かぬも招魂祭　登

黙々と餌ひろふ白鳩　路

繰返しエチュード弾きてひもすがら　和

苺ゼリーが癖になりたる　登

箸休めのつもりが本気に惚れちゃって　和

酔はせて口説き靡かせた閨　路

南無阿弥陀五右衛門風呂に浸りつつ　和

土間の荒壁下がるかんじき　路

冬満月やどかりの子の孵る刻　同

WOWOWで見るペリーメイスン　登

亡（ナウ）き夫へ謝し年金でのんびりと　達

町の占ひ末吉と言ふ　和

一面の花びらの帯神田川　達

ちんちん電車に風のあたたか　執筆

平成十三年六月十一日　首尾

於　新宿消費生活センター

寒蘭の紅

桃径庵和子宗匠追善

寒蘭の紅に面影偲びけり　島村暁巳
風を聞くかに浮かぶ水鳥　八代嫋
園児らに集合の笛吹かれゐて　染谷佳之子
ポップコーンの膝に散らばる　金久保淑子
終バス（ウ）の行ってしまった月の駅　篠原達子
おぼこ娘は新絹のやう　淑
おくんちの太鼓上手はくどき下手　同
何度やっても合はぬ家計簿　達
贋ダイヤ二重鞄で持ち込んで　之
三島由紀夫に似たるもみあげ　達
産聲を待ってる皇宮警察官　嫋
名盆栽の黒松の幹　巳
花大樹浴ぶる男はジャパネスク　嫋
茶房の窓に叩く春の蚊　之

島村暁巳　捌

蜃気楼見てきた話声高に　淑
自慢の酒で酔ひのほきほき　嫋
リストラで継いだ家業のちょうちんや　之
八手咲き出す裏の雪隠　同
かくれんぼふと気がつけばふたりきり　巳
ブルカ剥取りたまゆらの刻　嫋
姉婿の視線ベッドで反芻し　之
土蔵の奥に錆びた刺股　嫋
龍門の山脈深く夏の月　淑
縁台将棋多きギャラリー　同
発見の種老妻の名をつけて　達
聖書の上に鳩の餌置く　嫋
フレスコの修復終へて花仰ぐ　巳
テニスボールの弾む若芝　達

平成十三年十一月二十八日　首尾
於　源心庵

風鈴の舌

武井　雅子　捌

風鈴の舌も動かず路地の昼　武井雅子
盥に浮かべ冷やす甘瓜　鈴木美奈子
電子辞書文字検索のキー押して　下鉢清子
丸座布団に背伸びする猫　雅
最果ての義経神社弦の月　奈
尽す女と言はれさはやか　清
思ひ草乱れ乱るる恋の味　椿照子
シンコペーションかろき指揮棒　奈
高原にめんこい馬の鹿毛と青　清
夢物語短冊に書く　照
一銭で飴玉二つ買へた頃　清
壁の時計がぼんぼんと打つ　雅
ゲルマンの古城の花をツアーして　清
エリザベートの淡き春愁　奈

烏貝(ナオ)烏賊徳利に添へて出し　照
赤提灯の消えぬ盛り場　雅
世直しと有象無象の立候補　奈
南無阿弥陀仏と羅の刀自　清
太棹の津軽三味線弾語り　照
ぬらりひょんと居つき婿殿　奈
胎教にあれもこれもとEメール　雅
人生茫茫海は渺渺　清
寒の月太極拳を習ひたる　照
着ぶくれてみる大観の富士　雅
愛称(ナウ)は「貴婦人」野山駆けぬけて　奈
伝言板を駅員が消す　清
手びさしに見る雲珠ざくら今日の花　雅
百千鳥鳴く静かなる杜　照

平成十三年七月八日　首尾
於　光ヶ丘近隣センター

煤逃　百武冬乃捌

煤逃の男来りて水呷る　百武冬乃
　御用納で閉ぢる保育所　島村暁巳
遊歩道鳥影ひとつプロミナに　副島久美子
　シャッターチャンスきゅっと呼吸(いき)つめ　中田あかり
繊(ウ)月の貼りついてゐる雨上り　梅田利子
　八幡祭に揃ふ手古舞　同
青蜜柑羽織芸者の子と生れ　り
　かけおちルート決めるコンビニ　秋山志世子
不審船海底深く沈みたる　利
　憲法九條出番窺ふ　久
有難さとんとわからぬ秘蔵佛　巳
　泰西名画レプリカで良し　久
暮れなづむ花しろじろと江戸彼岸　同
　這ひ初めし嬰柔東風のなか　世

春（ナオ）の蚤才子と呼ばれた頃もある　り

猫踏んでゆく俺のパソコン　巳

どの家も鍵を掛けない島住ひ　利

郵便配達包む寒靄　巳

逢へばまたほくろの有処いとほしみ　久

灯り消してと抓る二の腕　巳

ブルカ脱ぎショートカットでスラックス　世

真桑を切って大皿に盛り　り

ゆらゆらと望月搖れる金魚玉　世

夢くり返し語る爺婆　利

当（ナウ）り籤オペラツアーへ連立ちて　久

馴れない酒にいささかの酔　世

忠魂碑しだるる花の賑ひに　乃

霞たなびく遠き山襞　り

平成十三年十二月二十六日　首尾

於　ウイメンズプラザ

祭かな

矢崎　藍　捌

炎帝を街に沈めて祭かな　矢崎　藍

法被の背中団扇ぱたぱた　佐久間　和　宏

塾帰り母さんのメモ三行に　黒木　美代子

ゲームソフトをひらくため息　小野　芳梅

妖(ウ)しが現れいでし月の面　宏

木犀の香と美女の目くばせ　藍

ひとり身にいっそリセットしたい秋　子

ネクタイゆるくしめて職場へ　梅

角擦れし鞄の中の文庫本　宏

鳥が下りし川面動かず　藍

参院選あり熱中症あり群衆　宏

CD発売たぶん大物　子

まっさらのぐい呑みを出す花の宵　同

仏蘭西窓は春雨にぬれ　梅

日語系講師北京の弥生尽　藍
　お土産ならばやはり豚まん　梅子
競り市のゴム長靴と前垂れと
　バケツで床に流す不景気　藍子
優しさに飢えしこころさまよえば
　小指の傷の血をなめている　梅宏
恋死にを埋め千年の砂の紋　藍
　はだかの山をえぐる砲弾　子
ひとすじの道照らしたる寒の月　梅
　マッチで点火だるまストーブ　子
セザンヌのシーツの皺の蒼ざめて　宏
　轍がつづく残雪の里　子
花の夢食うて老いたる貘と化し　藍
　ぽんとはじいた紙の風船　梅

平成十三年七月二十一日　首尾
於　桜花学園大学213教室

口寄せの

山口　美恵　捌

口寄せのゆたふっくらや梯梧の朱　山口美恵
羽抜の鶏が迷ひ込む土間　吉村ゑみこ
急坂にマウンテンバイク切り替へて　副島久美子
知らん顔するケータイの音　登坂かりん
名月の詩競ひ合ふ酔ふほどに　松本碧
紅一点の才のさはやか　久
ヤンママが時代祭の輿の姫　こ
実体験のアンケートとる　久
B型は気前がいいとおだてられ　碧
形状記憶のシャツは縦縞　こ
遺言が無駄になったと破り捨て　ん
聖母を濡らすうれし涙よ　碧
ベルリンの壁に植樹の花開く　久
揚雲雀追ふ気球さまざま　こ

二年越し（ナオ）マイレージ溜め春スキー　碧

こどもの姿見えぬ集落　ん

歯刷子は堅め普通と柔らかめ　同

塩ふりかけて食べる楊梅（やまもも）　こ

蛞蝓のやうにねとつく奴だから　久

啖呵とばして女横取り　こ

島住ひやっと届いた週刊誌　久

ペルー地震に消えた街並　碧

逃亡者月の光の凍つるまで　ん

穴を穿って氷下魚釣り上げ　こ

職退（ナウ）いて時間長者となる暮し　久

ちょっと粒々近江大福　碧

窯だしに炎の匂ひ花しきり　恵

眠り人形飾る雛壇　ん

平成十三年六月十七日　首尾

於　ウイメンズプラザ

赤瓦　文音

山田喜美枝　捌

風死すやシーサー座せる赤瓦　山田喜美枝
浜辺いっぱいビーチパラソル　吉村ゑみこ
名物裂茶碗袋を作るらん　吉藤とり子
足のしびれにちちんぷいぷい　枝こ
地蔵会の供物貰ふ子月の路地　子
差し向かひにてぬくめ酒飲む　枝
きっかけは街頭募金愛の羽根　こ
犬も飼えます七階の部屋　子
隣から練習曲の聞こえくる　枝
もてはやされて喜寿の手習　こ
幸運と黄色の財布贈らるる　子
散歩の帰り覗くブティック　枝
花吹雪家伝来の蒔絵重　こ
せんべいねだる春鹿の群

ふらここを幼に戻り漕いでをり　子
すれちがひ様受け渡すヤク　枝
直木賞ねらひ只今ホームレス　こ
蚊もごきぶりもみんな友達　子
爪を噛み膝をかかへて無愛想に　枝
一緒に死ぬかふいに問はれる　こ
しがみつく彼と揃ひのヘルメット　子
デンマーク製手編みマフラー　枝
月の森梟低く鳴きをりて　子
煙管磨きが日課だといふ　こ
パソコンのレシピ見乍ら厨事　子
やせたい人はけふもジョギング　枝
花の下記念写真は母かこみ　こ
弥生の原に流れゆく川　子

平成十三年八月三十日　起首
平成十三年九月十一日　満尾

藤の実の　文音

吉藤とり子　捌

藤の実の天より垂るる岩襖　吉藤とり子

鹿の声聞く峡の昼月　吉村ゑみこ

風爐名残家伝の軸に掛けかへて　山田喜美枝

庭園の句碑皆しかと読み　子

境内（ウ）に眷族揃ひ七五三　こ

顔見世狂言慣れぬ振袖　枝

仕組まれて会うた彼にはひと目惚れ　子

おみやげに買ふ古い燭台　枝

カメラにも騎馬の衛兵無表情　こ

嘴太鴉大騒ぎする　子

今日定年申し送りもすんなりと　枝

腹にしみこむ酒は「まごころ」　こ

おどり出るおかめひょっとこ花の宴　枝

忘れ霜あり痛む盆栽　子

望遠（ナオ）のレンズとらへし汐まねき　こ
素朴な風景潤吉展見る　子
村に住む外人一家人気者　枝
サッカー籤を君子敬遠　こ
与野党の憲法論議沸騰し　子
夜想曲聞く肩を抱かれて　枝
中学の頃から君と決めてゐた　こ
草原走るたくましい駒　枝
月の窓開け放たれて夕涼み　子
縁台将棋待って待たれて　こ
手作（ナウ）りのシフォンケーキでティータイム　枝
ペダル踏む娘のなびかせる髪　子
花万朶御堂におはす磨崖仏　こ
遠足の列くねくねと行く　枝

平成十三年十月十九日　起首
平成十三年十月二十七日　満尾

今朝の秋　文音

濁流や歩みより疾し今朝の秋　若林文伸
山洗はれて残る月影　生方卓
菊枕古希の宴に贈られて　小山百合子
バックパックの旅の計画　多村遙
鉢叩きリズム乱して通り過ぎ　卓
凍えた足をつつむ掌　伸
何もかもごっこ遊びの延長線　遙
ブルートレイン海峡を越え　子
昼夜なく燃えし高炉の消ゆる町　伸
屋台横丁ため息の日々　卓
ポケットにジャックナイフを握り締め　子
風切るごとく燕飛来す　遙
水俣の漁師が目指す花あかり　卓
弥生うまれの初孫の顔　伸

丘（ナオ）の上組鐘霞む教会堂　遙

ビー玉に透く遠き日の夢　子

ふりそそぐ七色ライト浴びてをり　伸

雪路優勝電気自動車　卓

襟巻の君に残り香抱きしめて　子

ドヌーブに似た女の裏窓　遙

掛け声で二階へ運ぶ一ケース　伸

機密費使ふ満漢全席　卓

月天心泥棒よけのゆっか咲き　遙

故郷の村のやうな箱庭　子

銭湯（ナウ）にペンキ絵風景新しく　伸

豆腐屋追ふ子道を教へる　卓

大甕にあるだけの花投げ入れよ　子

都踊りをまもる篝火　遙

平成十三年八月二十八日　起首

平成十三年九月十一日　満尾

二十韻

冬めくや

秋山志世子　捌

冬めくや獅子座流星青き線　秋山志世子

真鴨飛び立つ明け近き杜　中野昌子

キャンバスに嬰の横顔素描して　豊田好敏

作家の休暇包丁を研ぐ　高橋豊美

後（ウ）につきおけさ踊りの振り習ふ　敏

見目爽やかに姫様の木偶　美

月浴びて熱き抱擁夜来香　昌

スイング・ジャズの和平飯店　美

大道具運ぶバイトが日々の糧　敏

石蹴り缶蹴り呼びに来るまで　昌

いつのまに孑孑殖えし水たまり　敏

ＩＴ不況に救世主出よ　同

ＭＶＰ一家の誇り淡々と　昌

マスターリーグ年増惑はす　美

結ばれて月もほほ笑む橇の旅　敏

検診結果すべて及第　世

利酒のめくるめくほど馥郁と　敏

老番頭が浮かれ猫飼ふ　昌

花吹雪足柄山の金太郎　美

風船ゆるる茶屋の軒先　執筆

平成十三年十一月二十四日　首尾
於　角筈地域センター

中の海

金山征以子　捌

白鳥の声交しつつ中の海　金山征以子

干大根を揺らす潮風　近藤守男

軽トラの納車に合はせ帰り来て　山口佐喜子

クッション二つ袋から出し　吉村ゑみこ

友と見る万里の長城照らす月　吉田梨江

記念撮影こほろぎの和す　来海清

草泊手を重ねしは夢なるか　高原伸子

ローライズパンツに包む徒恋　下鉢清子

ジャズ流し金のラベルの洋酒棚　同

報道記者のなでる頬髭　ゑ

こども来(ナオ)て武者人形の太刀を抜き　同

夕月覗く軒の風鈴　守

監督も妻の監督到らざる　佐

「天網恢々」悪事もらさず　清

女舞思慕の募りて破門され　守

膝の猫にも妬心むらむら　鉢

コーラン(ナウ)の地に報復の続くテロ　清

音符のやうに蝌蚪の群れをり　伸

花筵靴とりどりに脱ぎそろへ　以

慎太郎刈して漕いだふららこ　梨

平成十三年十二月四日　首尾
於　練馬区高野台集会所

戦はぬ旗

五味　蓉子　捌

冬ざれや戦はぬ旗掲ぐべし　五味　蓉子

ひっそり白く咲ける山茶花　橘　朱鷺子

新曲の琴の合奏高らかに　内田　麻子

膝のバッグのビーズきららか　松本　碧

流星群月宮殿をかすめ飛び　八角　澄子

野菊を挿せし髪の長き娘　上月　淳子

おくんちのいなせな彼に惚れ直し　市野沢　弘子

しっぽく料理に盛り上る宴　山口　みづゑ

鷺一羽動かずをりて川中洲　淳

望遠鏡で探す特ダネ　澄

救援（ナオ）の物資は児らに届かずに　碧

がくりと駱駝坐り込みたる　朱

片脚を失くせしランボー月暑し　蓉

あふがせてゐる艶な絵団扇　ゑ

待ち望む嬰は王子か女王か　麻

ＤＮＡが切り開く夢　朱

大（ナウ）リーグイチロー遂にＭＶＰ　ゑ

春飛魚焼いて上げる祝盃　弘

花吹雪出航の銅鑼鳴り響き　碧

旅愁永日異国語の中　ゑ

平成十三年十一月二十二日　首尾

於　房連庵

時雨の色

鈴木千恵子　捌

大川や時雨の色のいやまさる　鈴木千恵子

冬の蜂どもうづくまる路地　生田目常義

小箪笥の棚にこけしを並べゐて　武村利子

屯所勤めもすでに七とせ　八角澄子

盃[ウ]の月の欠けさへゆらゆらと　椿紀子

草泊りにて獲たる少年　東明雅

いにしへの美男蔓も負け続き　澄

狂言打って稼ぐ汽車賃　紀

何もない砂漠の果に砂金掘り　雅

聖者の行進くり返し聴く　義

ノーベル賞学者好みの鮓の店（ナオ）　利

箱根鏡にて海女覗く月　澄

龍宮にある筈がない露天風呂　紀

君の心を巻きもどす術　利

黄昏のロンドンブリッジ・ヴィヴィアンリイ　雅

絹靴下を履いてテロルす　紀

これよりは卓球三昧あきもせで（ナウ）　澄

浮かれた猫が中空を飛ぶ　千

花朧爪先上りの坂の道　義

挨拶すれば山笑ふ朝　紀

＊野依氏好みの日進吉寿司が名古屋にある。

平成十三年十月十七日　首尾

於　江東区芭蕉記念館

風羅にも

鈴木　了斎　捌

風羅にも重さ軽さや桃青忌　鈴木了斎

行方定めず落葉舞ふ頃　橘　朱鷺子

一輪車乗れた得意の笑みならん　上月淳子

男の子にも必須家庭科　宮内志乃

月光にグラスリッツェン描きゐて[ウ]*　八代　嫋

鳥渡る下ゴンドラの澪　淳

菊枕君の残り香紛れなく　斎

侏儒の恋する幽閉の姫　淳

声色もＤＮＡがあらはれて　嫋

親の意見はみんな素通り　朱

土用波寄せまた崩れ地震の島　志

夏越神楽の笛のひと吹き　嫋

どっかりと動きたがらぬ犬を引く　朱

堕落論読むメノポーズなり　嫋

寝乱れの床を凍月照らし出し　斎

見直すほどに形佳き髭　朱

降り来し槍も煙りて河童橋　淳

ちょっと浅酌たたみいわしで　嫋

「花咲かば」と小謡聞こゆ垣の外　淳

灯火ほのか揺るる春宵　執筆

＊ダイヤモンド粉を付けた特殊なペンでガラス表面を削り、絵柄を描く工芸。

平成十三年十月十七日　首尾

於　江東区芭蕉記念館

街は雀色

高橋　豊美　捌

社会鍋渋谷の街は雀色　生田目　常義

むく毛の犬のくしゃみ一回　高橋　豊美

文庫本木の葉の栞求めきて　中村　ふみ

シャッターチャンス所かまはず　中野　昌子

満月[ウ]に女神の盗む不死の酒　池田　やす子

秋の蛍はわが片思ひ　同

スカートにトノサマバッタしがみつき　義

MRI[*]といふトンネルの中　み

水たまり頭の中に出来てます　す

手綱に作り煮込むこんにゃく　昌

やまがらめ仕込みて親父得意なり　同

夏草繁り「夢」の墓碑銘　み

普請中月影のさす菖蒲の湯　豊

腋下の黒子私のものよ　昌

さやうならテネシーワルツ踊る時　義

港見おろす大観覧車　す

吉凶を占ふ婆の笑ひ顔　み

納税期とて休む間もなし　昌

講道館勝負のあとの花の宴　同

じゃんけんぽんと遠足の子ら　み

*magnetic resonance imaging の略。強力な核磁場共鳴という物理現象を利用し、この共鳴によって放出されるエネルギーを信号として取り出し、コンピュータを用いて断層像を構成する。

平成十三年十二月十日　首尾
於　渋谷連句会

伊勢は津で

武村　利子　捌

伊勢は津で津は伊勢でとや小望月　武村利子

かすかな風に揺れる穂芒　中野たつ子

虫の音をめぐらしろくろ廻しゐて　松平菩提子

リフォーム仕立ちょっと変身　永田照子

聴衆（ウ）は一弦琴に波を聞く　た

口実と言ふ本の貸借　菩

ＢＳに写ってゐると報せくる　照

零したワイン縁の初めか　た

泣いて見せ嘘も真と紅金魚　菩

預金の減りが加速ぐぐっと　た

観阿弥(ナオ)も世阿弥も生れし土地に住み　照

炎翳しつ妖怪の舞ふ　菩

野良犬のやうにメッチェン追ひまはし　照

アパルトマンに籠り恋風邪　た

月ひとつ懸けて凄まじ御神渡　菩

日々好日と絵筆三昧　照

グルメ(ナウ)とて世界の料理満喫す　利

鶯ホケペチオペラ開演　菩

記念樹に札かけられて花万朶　た

ふらここゆらすおばぁ幸せ　照

平成十三年九月三十日　首尾

於　三重県総合文化センター研修室C

蝉の声　　松島アンズ　捌

雨上りにはかに繁し蝉の声　　梅田　實

競ふことなく夏雲雀鳴く　　高橋　豊美

発見の真筆論義果てもなし　　島村　暁巳

デジタルカメラポケットの中　　松島　アンズ

居待月（ウ）イルクーツクの一人旅　　秋山　志世子

水汲む娘霧の泉に　　古賀　一郎

紅葉かつ散りて枕のなみだあと　　青木　泉子

だまし上手をうまくだまして　　山田　美代子

すり切れたテープ流れる昼下り　　實

葛飾綺譚土堤の廃船　　豊

おふくろ(ナオ)の味のほどよき雑煮椀　ア

かまくら出でて指した冬月　巳

次世代に痛み残さんＮＧＯ　郎

ロボット犬を抱いて逢引き　世

プロポーズパントマイムで成功し　代

おぬしやるなと空に一閃　泉

隠密(ナウ)の帰京して酌む玉箒　豊

鐘供養にも整理券出て　巳

新調のオートクチュール花の陰　ア

夢ゆらゆらと蒲公英の絮　世

平成十三年七月二十八日　首尾
於　新宿角筈地域センター

銅(あか)の鍋　三木　俊子　捌

時雨るるや足尾に買ひし銅(あか)の鍋　倉本路子

トロッコふるる石蕗の花　三木俊子

子の描くキリンは紙をはみ出して　長崎和代

父さんの焼く堅焼せんべい　須賀恵子

有明(ウ)の門前通り湯の香り　高橋豊美

牧を閉ざして急ぐかの店　島村暁巳

瓢箪を転がり出でしキューピッド　路

カーテンの色風水で決め　和

曲馬団大入り袋次々に　巳

悪しき薬の甘き誘惑　浅野黍穂

ソネット（ナオ）を口ずさみつつ蠍飼ふ　巳

ヨットハーバー月の入り見ゆ　黍

発泡酒増税案のまた潰え　豊

独身総理人気上々　恵

好きな娘をそっと押してるラッシュ時　路

手にころがせる甘いマシュマロ　恵

やうやう（ナウ）に名画修復仕上りぬ　和

名誉市民と語る春宵　藤井芳子

端し切れの人形入れて花便り　黍

夢を抱きて鯰五郎跳ね　芳

平成十三年十二月十五日　首尾
於　新宿区社会教育会館

神酒（みわ）すこし　八代　嫋捌

神酒すこし亀にもささげ藤祭　八代　嫋

ゆるりと歩む頬に柔東風　原田千町

春惜しみ異国の人と語らひて　加藤　K

情報ルーム託児所もある　杉山壽子

自転車（ウ）のパンク修理を汗の月　近藤守男

甚平の裾ちょっと長過ぎ　秋山志世子

恋女房伽にあがると聞かされし　町

結婚指輪鏡台の上　男

下取りの電化製品有料に　同

豚骨ラーメン汁も残さず　町

着膨(ナオ)れてチェロの練習励みをり　壽

六甲颪つのるこのごろ　世

球場に轟く逆転本塁打　男

トレーラーハウス注目の中　壽

月影にもつるる二人聖廃墟　K

金の林檎をくれる少年　町

職(ナウ)退いてひねもすのたり冬隣り　K

何も言はない何も聞かない　町

天へ散る花追ひかける鳥のゐて　壽

歌ひつつ行く初虹の下　世

平成十三年四月二十五日　首尾

於　亀戸天神社

赤城嶺の

山口佐喜子　捌

赤城嶺の紫望み豊の秋　山口佐喜子

尾越の鴨も渡り来る頃　下鉢清子

月の窓ピアノレッスン限りもなし　近藤守男

百科事典好きな弟　吉村ゑみこ

手前味噌ほめられてゐてこそばゆい　青沼幸男

やけぼっくひに誘ふ居酒屋　来海清

からまりをやっとほぐした赤い糸　高原伸子

神在祭出雲国原　金山征以子

土地人は年木を高く積みて住み　鉢ゑ

買物上手うちのパソコン

ちんどん屋(ナオ)あとつけ廻す子と親と　伸

高波寄せる長き桟橋　ゑ

デパートのエスカレーター駆ける馬鹿　幸

魅惑の胸が羅に透き　鉢

赴任地で女と蚊帳に月を見て　以

立食蕎麦を今日はお代り　男

方丈(ナウ)はＲＶ車をよく磨き　清

漁協総出で鮎の放流　佐

花の莫蓙トランプ遊びの札を切る　幸

優勝決まり霞む球場　男

平成十三年十一月一日　首尾
於　練馬区高野台集会所

神の留守

山田　美代子　捌

走り根に足をとられし神の留守　松本　碧

大空高く渡る鶴群（たづむら）　山田　美代子

ぜんまいの柱時計の音澄みて　中村　ふみ

書取り練習やっと終った　池田　やすこ

割（ウ）り勘のレシート覗く月の下　豊田　好敏

弟切草をうがひ薬に　中野　昌子

万鬼祭仮面外して口付ける　高橋　豊美

さあ飛び立たう手をたづさへて　山本　要子

国産の気象衛星成功す　昌

一五四三　鉄砲伝来　や

砂糖壺から庭までの蟻の道　同

テームズリバー漕ぎしスカール　敏

鍔広の帽子貴婦人しなやかに　ふ

抱かれ夢見る初恋の男　碧

冬眠の山河ひとしく照らす月　豊

セロ弾きゴーシュ猫に教はる　要

廃校の最後の生徒姉妹にて　敏

へんろう宿に杖を忘れし　豊

みずしらず酌み交したり花の席　代

ブーメラン舞ふ風光る街　要

平成十三年十一月十三日　首尾

於　渋谷連句会

花野かな　文音　吉村ゑみこ　捌

振りかへる人ゐて広き花野かな　吉村ゑみこ

肩すれすれに蜻蛉群れ飛ぶ　本屋良子

月を待つ笛喨喨とひびくらん　中西道枝

ひとり暮しに配る弁当　中津秀美

〇印（ウ）またも増えたるカレンダー　子

色を押へたスーツ端麗　こ

誰にでも美女美女といふ男をり　美

財布の中はいつもからっぽ　枝

神苑の高き梢に青葉木菟　こ

推理小説伏せし籐椅子　子

金チェーンいつも眼鏡をぶらさげて　枝

「オーマイゴッド」癖になりさう　美

餌付した筈のお猿に脅かされ　枝

四輪駆動走る雪道　こ

スキー靴二足並べる月の宿　美

目を合はせれば胸が苦しく　子

詫び状の太宰の文字のこまごまと　美

瓶子大ぶり菜飯青饅　こ

花の昼寺までつづく稚児の列　子

蛤売りのにぎやかな声　枝

平成十三年十月二十二日　起首
平成十三年十一月二日　満尾

半歌仙

みちのくの　膝送り

みちのくの花の盛りに逢はむかな　青木泉子

風光る中駒の尾を振る　おおたけんのすけ

帆船は春のまなかを横切りて　佛渕健悟

五線譜に書く鳥のうた声　子

昨夜から月読男ひげ剃らず　け

穂芒折って胸のポッケに　悟

高速を飛ばす新車のすさまじく　子

石油と灯油間違って売る　け

ペコちゃんの瞳に似たるおさげ髪　悟

かまととなどと言はれたる頃　子

姉弟めをとの如く天の川　け

脱藩武士の月のせつなさ　悟

遠ざかる背中に残るゐのこづち　子

筆ペンさらさら写経一巻　け

つゆ明けを期して禁煙決行す　悟

店番の婆いつもいねむり　子

オゾン層蒼々として桜散る　け

姫虻も見に来るかヨーヨー　悟

平成十三年四月九日　首尾

於　多摩センター「そじ坊」

おらが春

ありったけ願かけをしておらが春　くのあや

正月小袖ならす玉砂利　宮川侊子

ビル街のざわめけるものひびききて　青島ゆみを

新機種といふデジカメを手に　細川研三

蟾影をさへぎるやうに露店商　伴野末季

料理の鯊を卓にのぼらせ　や

青島ゆみを　捌

柿熟(ウ)るる真っ只中を抜けて宿　侊

ちらりちらりと紅い前掛　を

眉を引き眉逆立て直面(ひためん)で　三

可愛い嘘を口で封じる　季

ぐい飲みに地酒溢れるほどに注ぎ　や

伏魔殿なり暴く陰謀　侘

額には弾正汗をしたたらせ　を

蚊柱の立つ先は三日月　三

「黒猫」をみつけて塵を払ふ棚　季

重きカバンを背なにチョコンと　や

逆上りする子の笑みに花吹雪　侘

うららの空を城のしゃちほこ　三

平成十三年十一月二十八日　首尾

於　熱田神宮龍影閣

泪色

池田やすこ　捌

蛤の泪色して売られけり　永島靖子

袢天の背に止まる初蝶　池田やすこ

姉妹土筆摘まんと連れ立ちて　靖

お河童の髪三つ編の髪　や

砂浜を見はるかしつつ月見酒　靖

船頭たちの語る不知火　や

切り貼りで間に合せおく秋障子　靖

いたはり欲しき指のささくれ　鈴木了齋

物言はず寄りて抱かれる夜の駅　や

BGMはいつもシャンソン　靖

ノルマンディ越ゆる戦車のコクピット　了

死者慰めよ寒の繊月　や

枯芭蕉夢の中にも揺れてをり　靖

五十年ぶり恩師囲みて　同

蚊帳の海みんな魚になりました　了

御伽ばなしは時に残酷　や

奥山の花薄墨に明けそめて　了

誰をか呼ばふ雉ほろほろ　靖

平成十三年二月二十六日　首尾

於　四の宮会

葉桜

加藤　治子　捌

葉桜や水源堤を風走る　由川　慶子

筍飯の手提げ弁当　佐久間　和宏

鮮やかな若宗匠の点前にて　加藤　治子

畳に残る香り微かに　稲田　千寿

月燦々一歩一歩を歩む砂浜　同

小鳥の声を真似る幼子　慶

なに思ふかがしの肩の右下がり（ウ）　宏

ふざけながらも探る眼差し　同

モトカレに似てゐる処に魅せられて　慶

風雅縦横雅趣無辺なり　寿

切り取りし胃袋半分春の月　宏

傘寿の祖父は白酒に酔ひ　寿

亀鳴きて時代遅れの歌手逝きぬ　宏

刈谷依佐美（ヨサミ）の高き鉄塔　慶

青空に天気予報も上々で　治

クイズに当り旅に出ようよ　慶

北国の家々飾る餅の花　治

粉雪積る築山の松　寿

平成十三年四月十七日　首尾

於　桜花学園大学

初しぐれ

木村　真呂　捌

くわんおんのあえかな朱唇初しぐれ　木村真呂

縄の匂へる雪吊りの松　伊勢本如代

航海図ルーペ片手に拡げゐて　鈴木美奈子

ポテトチップスいつの間に減る　副島久美子

月の窓準備ととのふ刺子展　久

かまはれぬ猫拗ねてやや寒　奈

秋深し古代に遊ぶ陸奥の旅　久

割箸添へる洋食の店　如

触れ込みは爵位を賭けた男とか　奈

秘めたる刺青（タトウ）いさやあらはに　久

湯の町の迷路めきたる裏通り　呂
はや明けそめし短夜の月　奈
リストラで時間長者の甚平さん　久
酔へばしのばる遠き故郷　呂
ＩＴの受講の予習孫を師に　如
魚氷に上る風のやららか　久
樽に棲み花にまみれるデォゲネス　如
大通りゆく春のパラソル　奈

平成十三年十一月十四日　首尾
於　池袋「滝沢」

団栗の音

高橋良風

屋根打って団栗の音ありにけり
　生け垣越しにすかす三日月

古賀幹子

爽やかにメールクリックすることに
　シフォンケーキが評判の店

くのあや

舗装路は青田の先で行き止まり
　尺蠖虫に歩幅計られ

武村利子

くのあや捌

風や

かるがるとシェイプアップの効果でる
　学園祭で塗りたくる壁

幹風

肌ふれし異形の殿に魅せられて
　ちょっと塩っぱい恍惚の夢

利幹

ブローチをお洒落な服にさりげなく　や

アイドル犬が実は番犬　利

凍てる月万博会場照らしをり　風

安楽椅子に新聞を読む　幹

生殖の医療に疑問投げかけて　利

立ち話する耕の人　風

花万朶堤防ぐるり包みこみ　や

お地蔵様が見てござる春　利

平成十三年十月二十四日　首尾

於　熱田神宮龍影閣

桐咲くや

式田　恭子　捌

桐咲くや昔の人の袖にほふ　松本　碧

雲の流れて小雀鳴く頃　式田　恭子

私流ホームページを立ち上げて　式田　和子

マニュアル通りなぞる店員　川名　将義

小さめの月見団子が流行るらん　和

今年たばこでちょっと一服　恭

冬仕度ユニクロばかり山と積み　和

箪笥にゴンを入れて安心　義

突然の電話に顔を赤らめて　碧

こんなことまで歌麿の秘画　義

甘い夢どかんと破る銃の音　義

あてにしてゐたボーナスが出ず　和

バーミヤン土に戻りて月凍つる　碧

聞こえぬ同志語る戦歴　和

この酒は何に乾杯しようかと　義

仔猫に仕込む招きのポーズ　義

咲き満ちて空を染めゆく花の山　碧

凧とりどりに旅の想ひ出　義

平成十三年五月七日　首尾

於　神田文教所　ハミングくらぶ

彼岸かな

尼宮の数珠さずかりし彼岸かな　加藤治子

西に東に残雪の嶺　矢崎藍

新入りの子猫の皿を決めかねて　八木聖子

客の方言まるで解らず　繁原敏女

ぽっかりと湯宿の窓をのぞく月　治

薄ヶ原の果のバス停　藍

帰り行く燕に皆が両手振り　聖

甘い青春胸をつきあげ　女

涙ぐむちびとのっぽの祝婚歌　治

ブーゲンビリアの樹下の教会　藍

繁原　敏女　捌

スコールは南の島を駆け抜けて　聖
　一円玉は拾われぬもの　女
月冴ゆる楽しからずや定年も　藍
　たらいまわしの政治改革　治
バーボン党ウォッカスコッチ老酒党　女
　チョコポッキーをぽりぽりと噛む　治
兄と佇ち父に撮られる花の庭　聖
　虻のうなりの去りしひととき　藍

平成十三年三月二十日　首尾
於　スペースK

沈丁花

高瀬　美保　捌

沈丁花娘のもの言ひの今朝やさし　高瀬　美保

進級試験終へて合宿　内田　麻子

鍋いっぱい鹿尾菜の煮物こげつきて　岡山　朱藍

そっくり戻る貸した大金　斎藤　久美子

望の月海辺走らすオープンカー　杉崎　雅子

バイオリンソナタ音色身に入む　美

赤い羽根つけてもらふも選りごのみ　藍

茶髪の男笑顔愛らし　麻

道尋ね一目惚れしたオフィス街　雅

パラサイトシングル迷ふ年頃　保

操られ定まる人生　今、昔　麻

昼寝の夢に鳥になるわれ　藍

湯ざめしてカーテン閉ざす月の窓　麻

出雲の国へつどふ神神　藍

とめどなく酌み交はす酒大らかに　美

イチローコール球場に湧く　麻

碧眼の花の女王馬車に乗り　花

小さき手離れあがる風船　雅

橋本桂

平成十三年三月十七日　起首
平成十三年四月二十八日　満尾
於　梶が谷　房連庵

流星雨　文音

棚町　未悠　捌

音もなく天の涙や流星雨　生方道草

望遠鏡が捉う繊月　小山百合子

甘柿の黒き器に供されて　雨乞小町

新米記者は原稿を待つ　多村遥

見直してやっぱり読めぬ床の軸　山寺たつみ

やご生るる川ゆらりゆったり　棚町未悠

綿飴（ウ）に顔をかくして宵閻魔　合

大胆不適な罪深き舌　草

ファックスが恋の名残をするすると　町

現地取材で乗った小型機　み

香辛料探して絹の道を行く　悠

二胡の調べは風をふるわせ　遥

骨を地に還して酌めば冬の月　み

狩を逃れた鹿と目が合う　草

まあだだよもういいかいと村童　遥

本の虫ならまだ夢の中　町

とめどなく花降る午後の野点席　合

風光る道ジョギングの人　悠

平成十三年十一月十一日　起首
平成十三年十二月十五日　満尾

蕗の薹

生田目常義　捌

蕗の薹ほほけてゐるや庫裡の裏　松本　碧

朝寝の人を起す鳶の音　生田目　常義

Eメール海馬（とど）来るとの知らせにて　式田　恭子

アールグレイをたっぷりと濃く　中村　ふみ

満貫の牌を引きたり望の月　鈴木　美奈子

酸漿鳴らすこれもご祝儀　恭

ウいつもぐの隣の柿は熟れてをり　碧

これでも女木登りが好き　恭

パリコレのスケスケルックつひに買ふ　ふ

恋に悔いなし左遷ＯＫ　碧

柔らかき肌（はだえ）の香り夢現　美

首相ゴルフで株価低迷　ふ

昼の月大蛇鱗を光らせる　碧

切子の盃の酒碧なり　美

お化けども車にぎゅうと詰めこまれ　恭

体重計にのせる片足　ふ

花の雨暗闇坂に降りしきる　常

よろしくお願ひ襲名の春　恭

平成十三年二月十三日　首尾

於　渋谷小野教室

吉原鎖

香気放つ麝香あげはの孤独かな　登坂かりん

紫華鬘生ゆる塀際　百武冬乃

扇干し片手で髪をかき上げて　鈴木美奈子

取材の記者に長話する　佐古英子

月代の屋台端からはしご酒　木村真呂

初潮ひたと寄せる舟溜（ふなだめ）　乃

西鶴忌二十ガワ（ウ）・マクベス大当たり　奈

をとこ四十九なぜかキレ勝ち　呂

不眠症羊百匹健在で　奈

幼稚園から通ふ予備校　乃

登坂かりん　捌

プロサッカー移籍ビジネスほしいまま　ん

人の恋びと攫うのが癖　英

愛咬(あいが)みの歯形に汗の沁みる月　奈

吉原鎖*の浴衣よれよれ　ん

街騒のとどく聖路加死に場所に　奈

飛行機雲ののびてゆく空　乃

デジタルカメラ砲列を敷く花の山　英

雛祭とて唱ふ童謡　呂

*江戸の遊廓、吉原でよく着られた◇◇◇紋様

平成十三年四月十一日　首尾

於　池袋　滝沢

マリアの像

長谷川芳子　捌

いと小さきマリアの像や秋惜む　長谷川　芳子

檀紅葉に映ゆる顔（かんばせ）　中森　美保子

月の舟かなりや銀の櫂もちて　伴野　末季

少し固めの雑炊もよし　青島　ゆみを

掛香の粋な柄ゆきプレゼント　保

電子辞書引く夏場所の枡　季

高原（ウ）に声絶え火矢の飛べる中　を

交通ラッシュターンドライブ　季

夢を食ふ阿修羅となりし美少年　芳

いとしさを増すきぬぎぬの髪　保

新装のブティックにある古時計　季
所信表明語尾も鋭く　を
よい酒と言はれ飲み干す寒の月　保
猫又どもが暮れの挨拶　芳
生涯を仮名一筋に墨をすり　を
背中支へる嬰のぶらんこ　季
御前の挙式の客へ花吹雪　芳
そぞろ歩めるうららかな庭　保

平成十三年十月二十四日　首尾
於　熱田神宮　龍影閣

春の宵

松原　弘子　捌

しばらくを余白と坐しぬ春の宵　川名将義

招き入れにし沈丁の香も　松原弘子

逃げ水を追ふムービーの切りもなし　新山香里

なんでなんでと幼児の問ひ　松本碧

甘露なる月の雫を壺に溜め　義

残る燕にしつらへる宿　式田恭子

聞こえ来し笛の高音のやや寒く　義

びくともしない宰相もゐる　香

ロトにTOTO底をつきたる軍資金　弘

しなだれかかる年増妖精　香

さっきまで上司の顔でゐたあなた　碧

鱧のあらひを抓む箸先　義

終列車故郷の山遠ざかり　恭

寒犬吠える月の街角　碧

通夜帰り老いは律気に風邪もらふ　恭

薬は嫌ひキッチンで酒　碧

待ちわびて夢のなかにも花吹雪　恭

初のおつかひ土匂ふ靴　香

平成十三年四月二日　首尾

於　神田分教場

陽はちりぢりに

松本　碧捌

あらたまの陽はちりぢりに海を染め　松本　碧

薺御形の萌出る丘　池田　やすこ

寒稽古たがひに息をはづませて　山本　要子

バイリンガルで号令をかけ　鈴木　美奈子

暮れなづむ夕月淡き国境　や

渡りの鳥の点となりゆく　碧

豊作の赤き林檎に齧りつき　奈

パソコンで描く顔はお多福　要

少将の通へる道の草深く　碧

男の涙川と流れる　や

ガザ地区は千年業火の燃え続き　要

化石に残るティタノザウルス*　や

月涼しおんでこ太鼓ひびかせて　奈

きりと鉢巻あふる冷酒　碧

原っぱの遊び場消えてひと昔　や

三角ベース日ながひねもす　や

そぞろ神われも浮かれて花の旅　碧

あなたこなたに風狂の蝶　執筆

*三重県鳥羽市で発掘された「鳥羽竜」

平成十三年一月八日　首尾

於　新宿　瀧沢

車田の稲穂

宮川　侊子　捌

*車田の稲穂に触れる恵みかな　宮川侊子

千把の準備忙しこの頃　杉山壽子

香台の螺鈿に月の光るらん　細川研三

解かぬままにおもちゃそのまま　島田裕子

帯板の芯の中布汗ふくみ　壽

涼しさを盛る果物の皿　侊

ウイコン絵に祈る平和を地球人　壽

ワンツースリーとステップ優しく　裕

崖を打つ大波小波泡飛びて　三

たんこぶが来るちょっとやばいぞ　壽

ウフフフフ内面夜叉のラブコール　裕

酒に一滴妙薬を入れ　侊

着ぶくれの膝に乗る猫薄目あけ　三

冬将軍の吹きたまる月　壽

信長の塀の写真を整理して　裕

新入社員希望ふくらむ　三

グローバルに流行るペタンク花盛る　侊

丈夫に過す日永悠々　三

＊飛騨地方の神田をいい、車田の田植、車田の刈り入れの行事として知られる。

平成十三年十月二十四日　首尾

於　熱田神宮　龍影閣

牡丹雪

山本　要子　捌

湯けむりに吸はれてゆくや牡丹雪　山本　要子

薄氷踏みし庭下駄の跡　中野　昌子

春鰯チーズ胡椒で味添へて　山田　美代子

留学生とすぐに仲よし　豊田　好敏

尖塔に昼の月置く港町　池田　やすこ

紅葉かつ散る七曲がり坂　こ

謙信（ウ）のやさしさ偲ぶ信濃柿　敏

人形師描く姫の眦　昌

すっぴんの君が最高君が好き　こ

麦酒に酔ったふりで抱かれる　美

機密費の機密次々あばかれて　敏

たたきにたたく津軽三味線　昌

月冴ゆる夢のスカウト膝談判　美

寒やいとする祖母のしきたり　昌

妖怪を図鑑で探すあにおとと　美

色鉛筆は二十四色　要

欠かさざる日曜礼拝花の雨　こ

剪毛終りはねる子羊　敏

平成十三年三月十三日　首尾

於　渋谷連句教室

短歌行　秋の富士

日高　玲捌

師の杖の指呼する先や秋の富士　日高　玲

風吹きわたるコスモスの原　高橋　豊美

名月をレンズの中に閉ぢ込めて　大島　洋子

螺旋階段降りる寮生　島村　暁巳

寒稽古小柄な主将声を張り　中野　昌子

跳んだり這ったり雪虫の群　美

センター街有相無相の恋模様　洋

ちょいとはにかみ「オレは女だ」　美

秘めやかに消えずに残る蒙古斑　洋

気根回らせ眠る佛頭　巳

一献の酒に癒され花の宿　昌

上り簗から肴届きぬ　美

大掃除(ナオ)はたきに直す迷彩服　玲

あれも聖戦これも聖戦　美

ルービックキューブまたぞろ流行だし　洋

益体もない夫の雑学　玲

陶枕に巫山の夢と名を附して　昌

物干台で殖やす夏草　巳

地平線どんと顔出す暑き月　同

のどを鳴らして猫の擦り寄る　洋

悲喜(ナウ)劇の舞台廻しは召使　巳

租界の町にピアノ置き去り　昌

握り飯割って手渡す花の宴　玲

歌のしをりに止まるてふてふ　執筆

平成十三年九月二十二日　首尾

於　新宿区角筈地域センター

表合せ八句　漱石忌

秋元　正江　捌

つい二つ饅頭食ひぬ漱石忌　秋元正江

冬毛ふかふか膝に乗る猫　橘　朱鷺子

ハンドベル少女等の頬輝やきて　倉本路子

熱砂の月に想ひ募らせ　浅賀丁那

むらさきのかぎらふぎやまん硯なる　江

春の小袖に夢のひと文字　路

今年また木下(おろし)道の花に逢ふ　朱

ふらここ漕げば海が迫り来　那

平成十三年十一月二十九日　首尾

於　羅浮亭

発句　冬の氷菓

秋元　正江

冬の氷菓ひと匙ふふみ目を合はす

つい二つ饅頭食ひぬ漱石忌

卵ふたつとくオムレツや冬の霧

月蝕や冬瓜にくず引きてをり

鱧の皮食ひし素顔のいつはれず

けふのことけふで終りぬ胡瓜揉む

あとがき

猫蓑作品集第十二号をお届けいたします。

雛祭も過ぎた三月五日は、滅法に冷え込んだ一日でしたが、早朝より黄昏どきまでの校正となりました。

柏市光ヶ丘近隣センターにお出で頂き、校正に力を灌いで下さいました、梅田利子・久保田庸子・桑原美津・八代嫋・山田喜美枝・吉藤とり子の諸氏に厚く御礼申し上げます。

平成十四年三月五日

下鉢清子

猫蓑作品集　XII

平成十四年四月吉日　発行

発行人　東　明雅

発行所　猫蓑会

定価　二千円（送料別）

印刷所　株式会社　岩田印刷